

第 40 回全国修学旅行研究大会

報 告 書

『学びの集大成を図る修学旅行』

— 修学旅行、その過去・現在・未来 —
(きのう) (きょう) (あす)



2023（令和5）年7月25日（火）

学士会館 2階 210号室

公益財団法人 全国修学旅行研究協会

目 次

主催者挨拶	1
-------	---

岩瀬 正司 公益財団法人 全国修学旅行研究協会 理事長

来賓挨拶	3
------	---

伊藤 史恵 氏 文部科学省 初等中等教育局 児童生徒課長

久保 麻紀子 氏 観光庁 参事官（国際関係）

賛助会員代表挨拶

石原 栄二 氏 近畿日本ツーリスト株式会社
執行役員 統括本部 東日本支社長

全修協報告	9
-------	---

「続・コロナ禍と修学旅行」

石原 輝紀 公益財団法人 全国修学旅行研究協会 調査研究部長

記念シンポジウム	22
----------	----

「修学旅行、その過去（きのう）・現在（きょう）・未来（あす）」

○シンポジスト

齊藤 正富 氏 文京区立音羽中学校 校長（全日本中学校長会 会長）

宮田 明子 氏 東京都立国立高等学校 校長

宮崎 活志 氏 文部科学省初等中等教育局 主任視学官

越智 良典 氏 東洋大学国際観光学部 客員教授

○ファシリテーター

大江 近 氏 元 早稲田大学教職大学院 客員教授

【主催者挨拶】



公益財団法人 全国修学旅行研究協会
理事長 岩瀬 正司

皆様、こんにちは。

只今ご紹介いただきました、公益財団法人 全国修学旅行研究協会の理事長 岩瀬正司でございます。

本日は公私ともご多用の中、多数の皆様方に、第40回全国修学旅行研究大会にご参加いただいております。誠にありがとうございます。

また、ご来賓の

文部科学省初等中等教育局 児童生徒課長

伊藤 史恵（いとう ふみえ） 様

観光庁 参事官 国際関係

久保 麻紀子（くぼ まきこ） 様

そして賛助会員並びに私ども協会の事業に、ご理解・支援して下さっている皆様方を代表しまして

近畿日本ツーリスト株式会社 執行役員

統括本部東日本支社長

石原 栄二（いしはら えいじ） 様

には、ご多用にもかかわらず、直接この会場においていただきお言葉をいただけることに、厚く御礼申し上げます。

さて、新型コロナウイルス感染症は完全収束には至っておりませんが、ほぼ日常の社会生活に戻り、学校でも通常の教育活動が回復してきました。この全国修学旅行研究大会も、この会場には130名を超える方々が、オンラインでも60名以上の方が参加しております。さらに、大会終了後の情報交換会にも70名の方に申し込みをいただいております。主催者として、このように盛大な大会が開催できますことは大きな喜びであり、同時に私ども協会の活動を支えてくださっている多くの皆様方に深く感謝申し上げます。

本大会冒頭の「全修協報告」では、昨年に引き続き、このコロナ禍に直撃された2021・令和3年度の全国の公私立中学校・高等学校の修学旅行実施状況を報告いたします。ほぼ3年に渡るコロナ禍が、修学旅行と学校教育、さらに旅行関連事業にどのような影響を与えたのか、きちんと実証・総括しておきた

いと思っています。

そして、本年度の研究大会は第40回という節目の大会になります。そこで「修学旅行、その過去（きのう）、現在（きょう）、明日（あす）」と題して、シンポジウムを行います。コロナ禍によって、修学旅行の意義が再認識されましたが、修学旅行の持つ教育性、文化性、そして、経済性の3側面から修学旅行のあり方を探っていきたいと思っています。登壇の皆様方は、各界を代表される学識のある方々ですので、ご期待いただきたいと思います。

修学旅行は平和な時代の象徴です。はるかヨーロッパのウクライナの地に平和が訪れることを祈念して、開会のご挨拶といたします。



【来賓挨拶】



文部科学省 初等中等教育局
児童生徒課長 伊藤 史恵 様

本日、第40回全国修学旅行研究大会が開催されるに当たり、御挨拶申し上げます。

本研究大会の主催者である公益財団法人全国修学旅行研究協会におかれましては、長年にわたり、修学旅行に関する調査・研究、情報提供など様々な活動を通して、有意義な修学旅行の実現に寄与されておりますことに、深く敬意を表します。

また、本日、御参会の皆様におかれましても、日頃より、修学旅行の充実に御尽力頂くとともに、文部科学行政に御理解を頂いておりますことに心から感謝申し上げます。

さて、修学旅行の実施にも多大な影響を与えてきた新型コロナウイルス感染症の法的な位置づけが、今年の5月8日に5類感染症に移行されました。

これに伴い、日本旅行業協会が作成していた「旅行関連業における新型コロナウイルス対応ガイドラインに基づく国内修学旅行の手引き」が廃止されるなど、修学旅行についても多くの制限が緩和されました。

各学校や学校設置者、旅行関係者の皆様におかれましては、これまでコロナ禍において、様々な工夫をしながら、子供たちの貴重な学びの機会を確保していただきましたことに改めて感謝申し上げます。

今後は、他の学校教育活動と同様に、引き続き児童生徒の健康状態の把握、適切な換気、手洗い等の対策を講じていただきつつ、より充実した修学旅行となるよう創意工夫をお願いできればと思います。

次に、最近のトピックも含め、修学旅行に関連のあることについて、2点お話しさせていただきます。

まず、令和7年4月から10月にかけて、大阪・夢洲において日本国際博覧会（大阪・関西万博）が開催されます。

大阪・関西万博は、「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマに、日本を代表するプロデューサーや、海外の国・国際機関によるパビリオン展示等の準備が進められており、先月末には入場料が決定され、学校団体割引も適用されることになりました。

万博は、社会が直面する課題の解決に向けた最先端の知見や世界の考えを子供たちが知るいい機会になると思いますので、修学旅行の行き先の候補の一つとして、御検討いただければと思います。

また、東日本大震災から12年となりましたが、震災の経験を踏まえた体験的な学習プログラムとして、被災地の現状を見たり、当時の体験を聞いたりする取組や防災・減災の知識を学ぶ取組は有意義であると考えております。

このようなプログラムを取り入れることについても引き続き御検討いただきたいと思います。

最後に、本研究大会の開催が、関係の皆様の対話や共通認識づくりを促進し、各学校における修学旅行の一層の充実・発展につながっていくことを期待しております。

また、本研究大会の御盛会及び公益財団法人全国修学旅行研究協会の今後のますますの御発展と御参会の皆様の一層の御健勝、御活躍を祈念して、私からのご挨拶とさせていただきます。



【来賓挨拶】



観光庁
参事官（国際関係） 久保 麻紀子 様

本日、第40回全国修学旅行研究大会が盛大に開催されますことをお慶び申し上げます。

また、本日の節目となる研究大会の開催にご尽力されました全国修学旅行研究協会様をはじめとするご関係の皆様方におかれましては、修学旅行に関する様々な調査研究や情報発信などに積極的に取り組まれていることに加え、日頃より、観光行政の推進にご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、教育現場におかれましては、長らく新型コロナウイルス感染症の影響により大変厳しい環境に置かれていたことと思います。関係の皆様におかれましては、このような状況の中、教育活動にご尽力されていることに心より敬意を表します。

また、観光関連産業の皆様におかれましても、教育旅行を含めた旅行需要に大きな影響があり、業界全体が未だ回復途上にあるものと承知しております。

海外教育旅行につきましては、コロナ前までは特に台湾やオーストラリアなどを中心に増加傾向にありましたが、新型コロナウイルス感染症の影響により長らく実施できていなかったものと承知しております。

その中でも本年4月末には、水際措置が終了となり、また、5月には感染症分類の見直しがなされたことから、海外教育旅行の更なる回復に向けて、明るい兆しが見えてきたものと考えております。

観光庁としましては、本年3月に公表した「アウトバウンドの本格的な回復に向けた政策パッケージ」の中で、次世代を牽引する青少年交流の促進を図ることとしております。その一環として、海外教育旅行の更なる回復に向けて、海外教育旅行プログラムの付加価値の向上に向けた支援を行うとともに、安全・安心に係る情報発信など、一層強力に取り組んでまいりたいと考えております。

さて、本日の研究大会の主題は、「学びの集大成を図る修学旅行」と伺っています。海外教育旅行を通じた多様な文化や人々と触れあう経験は、学生が海外に関心を持つきっかけとなるだけでなく、学校での「学び」との相互作用により、学生にとって素晴らしい財産となると考えております。

こうした学習を通して、日本の将来を担う学生の皆様には、これからの社会が、どんなに変化して予測困難な時代になっても、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、判断して行動し、それぞれに思い描く幸せを実現してほしいと思います。

本日の研究大会を通じて議論が深まり、これまで以上に教育旅行が豊かな体験と、より深い学びを提供される機会となることを期待しております。

最後になりましたが、我が国の教育旅行の更なる充実・発展と、本日お集まりの皆様方の益々のご活躍、ご健勝を祈念して、私のご挨拶とさせていただきます。



【賛助会員代表挨拶】



近畿日本ツーリスト株式会社
執行役員 統括本部 東日本支社長 石原 栄二 様

皆様こんにちは。ただ今ご紹介いただきました近畿日本ツーリストの石原でございます。

本日は「第40回全国修学旅行研究大会」が盛大に開催されますこと、協会をご支援させていただく賛助会員を代表いたしまして心よりお祝い申し上げます。

ご参加いただいております全国の教育現場の先生方、自治体、教育行政および教育旅行に携わる各社の皆様方には、日頃より弊社の教育旅行担当者に多大なるご支援、ご協力を賜りまして誠にありがとうございます。改めましてこの場をお借りし厚く御礼を申し上げます。

さて、昨年度は新型コロナウイルスの影響を受けながらも修学旅行が実施することができました。そして学校行事が児童生徒にとってとても重要であるということを改めて感じる事ができたというお話を昨年この場でさせていただきました。この春はコロナも明けて、従来通りの修学旅行が実施することができました。本当によかったと思っております。

弊社の統計ではありますが、本年度の国内修学旅行は、ほぼ延期はなく実施をいたしており、約90%がコロナ前の方面に戻っております。また、国内の校外学習・宿泊研修は、2018年度比75%まで回復してきており、児童生徒たちの学習の場が広がってきています。

しかしながら、コロナの後遺症というべき新たな問題が発生していることをこの場で皆様と共有させていただければと思います。

一つ目に、貸切バスの乗務員、バスガイドの不足によるバス不足です。(特に5月、6月首都圏・関西、10月、11月、12月首都圏・関西・沖縄) さらに2024年度より勤務間インターバル制度がさらに1時間伸びることで乗務員の確保に影響がでてきます。

二つ目には、タクシー修学旅行のドライバーの高齢化によるタクシー不足です。

そして三つ目は、物価の高騰による影響です。

この乗務員不足は関係受け入れ機関の皆様にもご協力いただいているのですが、修学旅行の日程が集中しているため解消がなかなか進まないのが状況です。特に学校が集中する水・木・金曜日にご迷惑をお掛けしている学校様もでてきているのが実情です。

解消に向けて進めていることは、修学旅行専用列車を利用いただくことで日程の分散ならびに JR 特別割引の利用で保護者様への負担の削減のお話をさせていただいております。また学校独自の出発日を

お決めになる学校様には、火曜日、水曜日出発はできる限り避けていただくをお願いをしております。是非ご協力いただけると幸いです。

物価高騰については、旅行会社各社企業努力を一生懸命させていただいておりますが、それだけでは対処しきれない状況まで来ています。コロナ前と同じ内容は難しく旅程の変更、または積立額の増額が必要になってきています。まだまだ物価の高騰は続くと思われます。旅行のクオリティを維持していくためにも物価の高騰を見据えたお積み立てならびに修学旅行専用列車の利用のご協力をお願いできればと考えております。

さて、弊社の取り組みを一つご紹介させていただきます。弊社では本年度からアレルギーに対応する専門の部署を立ち上げ東京地区の学校様中心にモデルケースとしてスタートいたしました。専門のスタッフが学校様や受け入れ施設の窓口となって、より正確に情報伝達できる仕組みとなっています。年々、アレルギーの生徒様が増加しており、さらに複雑化してきています。弊社の学校担当者も旅行実施の一連の流れでアレルギー対応はしておりますが、担当者任せにすることなく会社としてフォローをしていくことで、学校様ならびに受入施設様との行き違いを無くし、児童生徒の皆さんの安全安心を提供することを第一に進めております。

私たちは、本格的な旅行が復活しはじめ、通常の業務ができるようになりましたが、児童生徒の安全安心の対策は、なくてはならないことであることを肝に銘じて今後も業務を遂行していきたいと考えております。是非、今後ともご支援ご協力宜しくお願いいたします。

結びになりますが、本研究大会の御盛会及び公益財団法人全国修学旅行研究協会様の今後ますますのご発展を祈念するとともに、ご参会の皆様方の一層のご健勝、ご活躍を祈念しご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。



【全修協報告】

「続・コロナ禍と修学旅行」



公益財団法人 全国修学旅行研究協会
調査研究部長 石原 輝紀

皆様こんにちは。ただいまご紹介をいただきました、全国修学旅行研究協会の石原と申します。本日は大変お忙しい中「第40回全国修学旅行研究大会」にご参加いただき誠にありがとうございます。また、オンラインでのご視聴の皆様におかれましても、ご参加ありがとうございます。

本日の全修協報告は、昨年、本研究大会でご報告させていただきました、「2020（令和2）年度コロナ禍と修学旅行」の続編といたしまして、コロナ禍2年目を迎えた、2021（令和3）年度の修学旅行の動きを発表させていただきます。

「2021（令和3）年度 コロナ禍と修学旅行 新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が与えた修学旅行への影響 Vol. 2 全国公立高等学校・中学校修学旅行実施状況調査」です。

コロナ禍1年目、様々な苦難を経験し、2年目を迎えた教育現場での修学旅行実施に向けた取組みの結果を限られた時間ではありますが、お伝えできればと思います。よろしくお願いいたします。

本調査は、本来、海外修学旅行・海外研修旅行の実施状況を調査する目的で20年以上前から当協会の主要事業として行ってきたものです。しかし、令和元年度末より全世界に拡大した「新型コロナウイルス感染症」の影響により、一切の海外渡航が制限され、海外修学旅行・海外研修を実施することが出来なくなりました。そして更に、その影響は日本国内の修学旅行にも広がり、修学旅行の中止という事態にまで至りました。

当協会はこの事態を受け、本調査を国内・海外を問わず全国の公立中学高校の修学旅行の実態調査に切り替え、昨年度「2020（令和2）年度コロナ禍と修学旅行」として発表させていただきました。

そして、2021（令和3）年度調査では、従来の海外修学旅行・海外研修の実施状況調査に戻すため準備をしておりましたが、残念ながらコロナの収束を見ることはなく、海外への教育旅行の再開は見送られました。

今年度の発表は、「続・コロナ禍と修学旅行」として、コロナ禍2年目の修学旅行の実態を令和2年度との比較を中心にご説明させていただきたいとおもいます。まずは、2020（令和2）年度を少し振り返ってみたいと思います。

海外修学旅行は、事実上実施不可能となりました。そして、それだけではなく、日本国内の感染状況も全国的に拡大し、国内の修学旅行の実施に関しても是非を問う事態となりました。

しかし、文部科学省は、教育活動における修学旅行の重要性を発信。「教育的意義や児童生徒の心情等に配慮し、当面の措置として取り止める場合においても、中止ではなく延期扱いとすることを検討するなどの配慮をお願いしたい」としました。

教育現場も何とか修学旅行を実施できるよう、延期に延期を繰り返し、コロナの収束を待ちましたが、幾度となく新たな波に阻まれ残念ながら、最終的に「中止」という選択に至った学校が多数あった年でありました。

令和2年度の高等学校の状況からご説明します。これは、全国の高等学校の修学旅行の実施校数・実施率、修学旅行参加生徒数・参加率を表した表です。調査の対象は、令和2年度文部科学省学校基本調査による学校数と全日制2学年と定時制3学年の生徒数です

2020（令和2）年度、全国公立合わせて高等学校の修学旅行実施率は31.3%。生徒の修学旅行参加率は24.5%となり、多くの生徒が修学旅行の機会を失いました。実施率に比べ生徒の参加率が低いのは、修学旅行は実施されてもコロナ禍での参加については、各家庭の考え方があり、参加に“同意できない”との事情があったものと推察されます。

これは、旅行方面別の構成です。公立共に、「中止」「次年度へ延期」が大きく占めています。実に公立校は、2,600校余り、私立校は800校余りの学校が修学旅行の実施を断念しました。

参加人数の構成です。公私合わせて約62万人もの生徒が修学旅行を経験することが出来ませんでした。高校は、第2学年時に修学旅行を実施することが多いため、次年度へ延期という選択をした学校も相当数ありました。本日このあと「令和3年度コロナ禍と修学旅行」の数値には、3年次に実施できた学校と出来なかった学校が含まれています。

続いて令和2年度の中学校の状況です。実施校数・実施率、参加生徒数・参加率はこのようになります。高校同様、調査対象は、令和2年度の文部科学省学校基本調査のデータです。対象学年は3年生を対象にしています。

公立合わせて、実施率は56.0%。参加率が50.7%でした。

実施率に比べ参加率が低いのは、高校と同様の理由と考えられます。コロナ禍1年目は、原因不明の新型コロナウイルスに対して、学校も家庭も不安感が強く、危機回避という考え方が先行していました。保護者の皆さんが、修学旅行参加同意書に署名することに躊躇することもやむを得ない状況であったと思います。

旅行の方面別の構成です。全国で、公立中学校は、約2,600校、私立中学校は約300校が修学旅行中止の判断をしました。判断基準は様々ですが、刻一刻と変わるコロナの感染状況に、その都度、

判断を迫られる教育現場の先生方のご苦勞は計り知れないものであったと思います。実施した学校も、リスク回避を前提とした修学旅行の実施というケースが多くを占めました。

旅行方面別参加人数構成です。公立中学校で約324,000人、私立中学校で約36,000人の生徒が中学校生活での修学旅行を経験することなく卒業ということとなりました。

多くの学校では、生徒たちの心情を思い、修学旅行に代わる思い出作りとして、様々なイベントが「代替行事」として実施されました。これはその一例です。「航空機チャーターフライト」「リモート修学旅行」「地元再発見旅行」など、様々な工夫をこらした行事は、中学、高校生活での、仲間と過ごした思い出の一つとなりました。

令和2年度の全国的な動きをまとめますと、コロナ禍1年目の令和2年度は、知識の無い正体不明のウイルスに対し、「リスク回避」を一番に考え、“動かない”、“近寄らない”、“触れない”という選択を執ることとなりました。最終的に多くの学校が「中止」という判断に至り、学校生活の思い出作りとしての様々な「代替行事」が実施されました。

多くの学校の修学旅行中止の一方で、実施校については、感染予防、感染拡大防止の観点から、移動時間の短縮、旅行期間の短縮、移動手段の選定等「3密回避」の対応をした上での実施となり、地元完結或いは、近隣県での実施に移行されました。3泊4日の旅行期間を2泊3日や1泊2日若しくは、日帰りに変更し、公共交通機関を利用せず、貸切バス等での移動にし、極力人との接触を避けるなどの工夫がされました。

これらの対応による旅行方面の大きな変更は、修学旅行受入自治体のみならず、輸送機関にも深刻なダメージを与えました。もちろん海外への修学旅行はありません。

以上がコロナ禍1年目の、令和2年度の状況です。では、これよりコロナ禍2年目の動きについてご報告させていただきます。

令和3年度もコロナの収束は見えません。しかし、コロナ禍1年間の経験のもとに、家庭も、学校も、修学旅行の受入れ側も、輸送機関も、そして旅行業界もコロナ禍での修学旅行の実施に向けて動き出します。修学旅行の実施率は飛躍的に回復しました。

本日は、一つ目に、回復の状況について、二つ目に、実施された旅行方面とその内容について。そして三つ目は、コロナが残した今後の課題について。この3点についてご報告させていただきます。

まず、修学旅行実施率の回復についてです。高等学校の状況です。全国の公私立高等学校の修学旅行の実施校数・実施率、修学旅行参加生徒数・参加率を前年度と比較しました。

公立高校の実施率は、前年度の33.5%から79.2%まで回復、私立高校も、25.3%から67.9%まで回復しました。参加生徒数も、(公立は)28.4%から71.6%、(私立は)16.6%が48.2%となりました。

公私立合わせて、全国の高等学校4,895校の76.1%に当たる3,727校の学校が修学旅行を実施し、642,118人の生徒が日本各地に旅立つことができました。この数値には、令和2年度の説明の時に触れた、次年度へ延期をした学年で無事実施をすることが出来たものも含まれています。

一方で、まだ、30万人余りの生徒たちが修学旅行に行けなかったことも事実です。

しかし、令和3年度も2年度同様、コロナの感染状況は予断を許さない状況下でありました。そんな中、様々な判断があったと思いますが、経験値による工夫で大きく前進した一年であったと思います。

公立高校の旅行方面別の構成です。前段でお話した令和2年度との比較です。この部分が中止ですが、これだけの回復となりました。高校生の場合、令和3年度も一定数「次年度へ延期」の割合があります。皆さんご承知の通り、令和4年度は、コロナも大分落ち着いており、4年度には、何らかの形で、この学年の生徒たちも修学旅行を実施できたのではないかと思います。令和4年度の実態調査は、現在、進行中です。

方面別の参加人数はこのようになりました。

同様に私立高校の旅行方面別校数の構成です。公立校同様、ここまで回復しています。

参加人数の構成です。私立校の回復が、公立に比べ若干低いのは、一つには海外修学旅行を実施していた学校が公立に比べ多いことがあると思います。国内に切り替えて修学旅行を実施した学校もありますが、修学旅行自体は中止として、別に国内で語学研修や異文化理解学習等、代替りの旅行や行事を実施した学校も数多くありました。

では次に、中学校の状況です。昨年度との比較です。

公立中学校は、88.1%、私立中学校は52.7%まで回復し、公私立合わせて85.4%となり、8,544校897,043人の修学旅行が実施されました。

中学校は、3年次に多くの学校が修学旅行を実施します。年度内に実施出来ない場合、そのまま卒業ということになります。何とか実施させてあげたいという先生方や保護者の方々の思いが、この実施率の回復に反映していると思います。

公立中学校の旅行方面別の構成です。前年度との比較による実施率の回復はご覧の通りです。そして実施された、これら旅行方面の内容については、次の部分で触れさせていただきます。参加人数の構成はこちらになります。

私立中学校の「中止」もここまで減りました。校数と参加人数構成はこの通りです。

以上が、令和3年度修学旅行の調査報告の一つ目「修学旅行実施率の回復」についてです。

コロナ禍が続いている中における、この飛躍的な回復は、学校、家庭を中心に修学旅行に関わる全ての人たちの思いや努力や工夫によって大きく前進したものであり、日本独自の文化として根付いている修学旅行の重要性や意義を再確認出来る結果であったと思います。

では2つ目に、実施に伴う旅行方面の変化とその内容についてご報告いたします。

一つ目でご説明した通り、修学旅行の実施率は飛躍的に回復しました。「リスク回避」による中止という考えから、リスクの中でどう実施するかという考えに転換がされました。しかし、令和3年度も、依然コロナ禍であり、その中での修学旅行実施には、やはり多くの制限を課すこととなりました。

その制限は、各家庭、学校内、旅行中の感染予防対策の徹底をした上での、移動時間の短縮、旅行期間の短縮、移動手段の選定など、やはり「3密回避」という前年度対策の継続です。対策自体変わりは

ありませんが、一つ違うのは、一年間のコロナ禍の経験があるということです。予防や感染時の対応はどうかなど、抑えるべきポイントを学んでいるという点です。

移動時間の短縮、旅行期間の短縮、移動手段の選定により、旅行方面は大きく変わりました。ここでは公立学校の、コロナ前2019（令和元）年度との比較により旅行方面の変化を示し、その変容がどのような影響を及ぼしているかお伝えしたいと思います。

では、まず高等学校の状況です。

このグラフは、コロナ前、令和元年度の公立高等学校の修学旅行の旅行方面別のグラフです。単位は校数です。ご覧いただき、お分かりになるように、関東、近畿、沖縄の3方面への修学旅行が大きな割合を占めています。この割合は、コロナ前十数年変わっていません。謂わば公立高等学校の従来の修学旅行の形です。それが、令和3年度は、このようになりました。

コロナ前、修学旅行先の約6割を占めていた上位の関東、近畿、沖縄方面は激減しました。沖縄は、交通手段が航空機のみであり有事の際の対応の不安感から、近畿、関東は人の多さという接触リスクの回避から、令和3年度も回復に至りませんでした。移動時間の短縮、人との接触回避を重視した旅行方面が選ばれました。

従来、修学旅行先として人気の方面は敬遠され、全体の構成比では低かった東北、北陸、東海、四国が増加するという逆転現象が起きました。地元、隣県への旅行と言っても関東や近畿はどこも人が多く、それらが東北、北陸、東海、四国などへ動いた結果がこの現象を生みました。

九州は、7県のその大半が関東方面への修学旅行を実施していましたが関東を避け、九州7県内での双方向の旅行や、沖縄を予定していた近畿地区の学校等の振り替え先として増加しました。国内の中でも、それぞれの地域で回りの環境により増減するという明暗が分かれました。

円グラフで比較するとこのような構成になります。絶対数は少ないですが、東北、北陸、東海、四国は、コロナ前と比較して約3～10倍の学校が訪れました。

続いて、公立中学校のコロナ前、令和元年度の修学旅行の方面別グラフです。

高校以上に、はっきりとした旅行方面の分布です。全国から沢山の学校が近畿方面（主に京都）と関東方面（主に東京、ディズニーでしょうか）を目指して修学旅行を実施していました。

そして、令和3年度です。

高校同様、人気の目的地、近畿方面と関東方面は激減となりました。理由も同様、人の多さ、人の集まるところからの回避です。一部では、東京を通過することさえも避けたいとの考えもありました。

他の地域は、ほぼ全て増加となっています。その内容はやはり地元、隣県からの修学旅行です。コロナ禍という、まさに「禍」を受けた地域と「コロナバブル」という特需を受けた地域が高校以上にはっきりとしました。

北海道や九州は、他県からの修学旅行は減りましたが、道内、九州7県相互の修学旅行で、コロナ前より増える現象が起きました。沖縄県は、他県からの修学旅行は、ほぼ無くなり、沖縄県内の学校のみの行き来となったため減少となりました。

円グラフでの比較です。近畿、関東の2強から、日本全国にバランスよく広がったように見えますが、その内容は、再三申し上げた地元型の修学旅行です。この旅行方面のバランスが全国各地から相互にその地を訪ねるものであれば申し分ありませんが、特殊事情が起こした現象です。

学習指導要領にある「旅行・集団宿泊的行事」に含まれる修学旅行は、本来、平素と異なる生活環境にあって見聞を広めるもので、やはりある程度遠方への移動が伴うものであると考えます。

コロナ禍2年目の修学旅行のまとめです。

中学校、高等学校共に、コロナ禍2年目は前年の経験を活かして、コロナ禍において、如何に修学旅行を実施するかという考え方に転換されました。日常の生活から感染予防対策を徹底し、感染時における対応の準備も怠りなくし、家庭、学校、受け入れ施設、輸送機関、旅行会社が連携を取り、万全の体制で実施を迎えるに至り、飛躍的な回復を見せました。

もう一つ実施率回復の要因として、前年、修学旅行中止に伴い行われた「代替行事」（日帰り旅行等）の扱いを修学旅行とした学校が増えたこともあると考えられます。

但し、やはりあくまでもコロナ禍での修学旅行実施であること、リスク回避の観点においては、前年同様、3密回避は重視され、各都道府県共に、コロナ前に行われていた旅行方面とは大きく変わりました。そして前年に引き続き、旅行方面の変容は、修学旅行の受入地のみならず、輸送機関にも多大な影響を及ぼしました。

参考に、輸送機関の一例として修学旅行の航空機の利用状況について少し触れたいと思います。これは都道府県別の公立高校の航空機を利用した修学旅行の校数の令和元年度から令和3年度の推移です。

令和2年度コロナ禍1年目の修学旅行中止に伴う激減は言うまでもありませんが、修学旅行実施率が8割近くまで回復した令和3年度においても、航空機の利用は戻っていません。

航空機のコロナ対策の安全性は十分理解されていても、まだ、躊躇するところが見られました。

令和元年度は、全国の公立高等学校の約75%が航空機を利用し修学旅行を実施していましたが、令和3年度は、僅か約18%という状況でした。沖縄をはじめ、コロナ禍において実施する修学旅行の遠隔地を避けた旅行方面への変容は、そのまま航空機利用の激減に繋がり、コロナ禍2年目も回復には至らず、航空会社に甚大な影響を及ぼしました。

以上が、令和3年度の修学旅行の回復状況、旅行方面の変化についての調査結果です。全国の状況についての報告でしたが、各都道府県別の回復状況、旅行方面の変化の詳細は、本誌に掲載しておりますので、ご興味の御有りの方は当協会HPに全ページ掲載しておりますのでご覧いただければ幸いです。

そして、令和4年度が終了しました。現在調査を進めておりますが、地域差はありますが、修学旅行は概ね予定通り実施されています。旅行方面もコロナ前の状態に徐々に戻ってきています。各学校が、掲げる学校の教育目標に沿った素晴らしい修学旅行が実施できているものと、最終的な調査結果が出るのが楽しみです。

では、3つ目の報告としまして、今後の修学旅行実施に関わる、このコロナ禍が残した課題についてお話をさせていただきます。それは、「人材不足」です。

新型コロナウイルスにより、旅行需要は落ち込み、レジャー業界は甚大な影響を受けました。宿泊、観光、食事等、所謂、旅行に関わる業種の殆どがその煽りを受けました。そしてそれは、縮小、撤退、倒産と進み、人員整理、離職という人材流出となりました。

ある転職サイトへの掲載会社数は、各種業界全体では、新型コロナウイルスによる1回目の緊急事態宣言の時期（令和2年4月）で一時的に下落したものの、令和2年8月以降は、ある程度安定しましたが、レジャー業界については、令和2年1月をピークに一気に落ち込み、その後も、その状況は続きました。「宿泊業、飲食サービス業」の従事者が賃金下落に伴い転職や就職を希望するも、同業界内の求人もなく、他業界に転職。レジャー業界の人材流出となっていました。

今、旅行需要の回復に伴い、レジャー業界も一日も早く業績回復に転じたいところではありますが、この人材不足が大きな足かせとなっています。

この人材不足は、修学旅行の実施にも大きな影響を与えています。

まず、貸切観光バスの確保の問題です。旅行需要の冷え込みは、貸切観光バスの稼働を止め、ドライバーは物流等に転職。今、ドライバー不足という課題を抱えています。バスはあっても走らせるドライバーがいないという状況です。修学旅行のピーク時でのバスの確保は大変困難な状態です。

次に、宿泊・食事・観光施設における対応の低下です。

人手の足りない部分は、臨時の職員で対応せざるを得ません。従業員の質の低下は、様々な問題を引き起こします。食物アレルギー対応などは間違いがあってはならない最も重要な部分です。徹底した人材教育が求められます。

他にも、ガイド不足や、民泊事業からの撤退、縮小など現在修学旅行で必要とされている要素も人材不足により十分な提供が出来ないことが懸念されます。

修学旅行を取り扱う旅行会社の人手不足も深刻です。学校訪問、企画提案、打ち合わせから修学旅行実施時の同行と一貫したケアに手が回らないとの実態も聞こえてきます。

修学旅行はある意味特殊な旅行です。観光・旅行業界挙げての対応が求められています。

以上、「令和3年度コロナ禍と修学旅行」について3点のご報告をさせていただきました。最後に少しだけ海外修学旅行の情報をご紹介します。

今回の調査で、2022（令和4）年度、海外修学旅行の実施を予定している高等学校の情報をご提供いただきました。令和4年5月1日の段階での実施予定ですので、最終的に実施に至ったかどうかは、現在調査中の「令和4年度コロナ禍と修学旅行」でご報告できると思います。

ここに、コロナ前の2018（平成30）年度の実績との比較を表にいたしました。校数比で公立校が31.4%、私立校が26.4%という状況ですが、コロナ禍を乗り越えて、間違いなく今後再開、そして前進していくものと思います。コロナを通じて、国際情勢もある意味身近になり、国際理解教育にも関わってくる部分も見えてきたと思います。

昨年に続き、本年も「コロナ禍と修学旅行」として、2021（令和3）年度の修学旅行の現状について発表をさせていただきました。コロナ禍2年目を迎え様々な経験を積み、多くの修学旅行に関わる皆様の努力によって、修学旅行は回復に向かっています。

令和3年度、旅行方面はコロナ前の状態には戻っていないとご説明しましたが、コロナ前の旅行方面のバランスが、あるべき姿ということでは決してありません。日本国中、さらには海外も含め素晴らしい学習素材は、あちこちにあります。

今回のこのコロナで唯一プラス面に働いたことは、学校をはじめ、修学旅行に関わる全ての人々が、改めて修学旅行の意義や在り方を考えたことではないでしょうか。やむを得ない事情で、初めて訪れた場所に素晴らしい発見があったのではないのでしょうか。是非、これからの修学旅行を考える上での知見として残していただきたいと思います。

そして、受入側も人気の高い方面は、更なる研鑽を積んでいただき、コロナ禍で思わぬ特需を受けた地域は、一過性のものと捉えずに教育旅行の重要性を認識していただき、引き続き選んでもらえるための努力をお願いしたいと思います。

「ウィズコロナ」を平時の生活として、これからの修学旅行は行われていくと思われます。そして修学旅行はそこの中にあっても常に発展的な変化をしながら、更に素晴らしい文化として継承されていくと確信しています。

ご清聴ありがとうございました。



2021（令和3）年度

続・コロナ禍と修学旅行

—新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が与えた修学旅行への影響VOL.2—
【2021（令和3）年度 全国公立高等学校・中学校修学旅行実施状況調査】

2023（令和5）年7月25日
公益財団法人 全国修学旅行研究協会
調査研究部長 石原 輝紀

2020（令和2）年度 コロナ禍と修学旅行

—新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が与えた修学旅行への影響—
【2020・令和2年度 全国公立高等学校・中学校修学旅行実施状況調査】

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的流行（パンデミック）により、事実上、海外修学旅行の実施が不可能になった。日本国内も感染状況に地域差はあるものの、全国的に感染は拡大しており、国内修学旅行の方面選定はおろか、実施の是非という事態にも陥った。

しかし、文部科学省は、修学旅行の重要性を一貫して発信。「教育的意義や児童生徒の心情等に配慮し、当面の措置として取り止める場合においても、中止ではなく延期扱いとすることを検討するなどの配慮をお願いしたい」とした。

教育現場も何とか修学旅行を実施できるよう、延期に延期を繰り返し、コロナの収束を待ったが、幾度となく新たな波に阻まれ、残念ながら、最終的に「修学旅行中止」という選択に至った学校が数多くあった年となった。

実施校数・実施率／参加生徒数・参加率

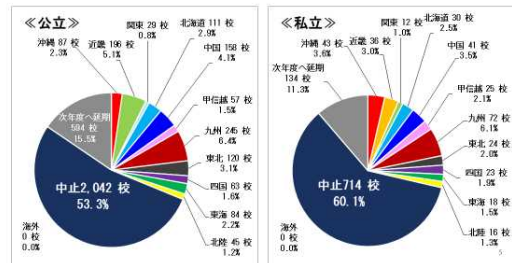
（校、人、％）

区分	対象校数	実施校数	実施率	対象生徒数	参加生徒数	参加率
公立	3,570	1,195	33.5	691,147	196,277	28.4
私立	1,342	340	25.3	341,349	56,542	16.6
合計	4,912	1,535	31.3	1,032,496	252,819	24.5

※対象校数は、文部科学省令和2年度学校基本調査高等学校（全日制・定時制・中等教育学校）による。
※対象生徒数は、全日制第2学年と定時制第3学年及び専攻科、別科、中等教育学校後期課程第2学年の生徒数を表示した。

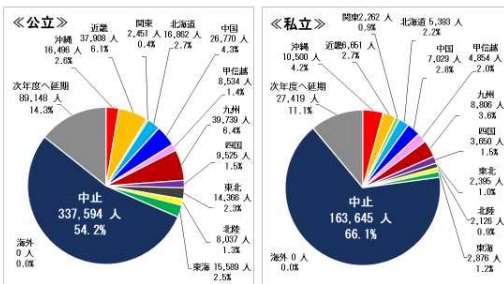
旅行方面別校数構成

※「中止」「次年度へ延期」を含む



旅行方面別参加人数構成

※「中止」「次年度へ延期」を含む



実施校数・実施率／参加生徒数・参加率

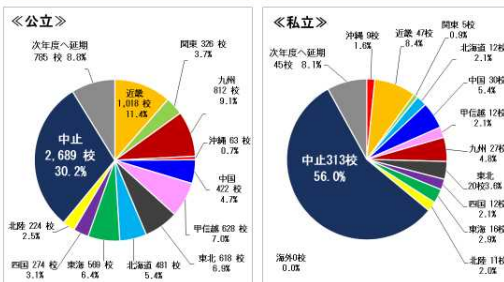
（校、人、％）

区分	対象校数	実施校数	実施率	対象生徒数	参加生徒数	参加率
公立	9,291	5,435	58.5	964,663	511,698	53.0
私立	782	201	25.7	78,081	17,373	22.2
合計	10,073	5,636	56.0	1,042,744	529,071	50.7

※対象校数は、文部科学省令和2年度学校基本調査中学校による
※対象生徒数は、第3学年の生徒数を表示した。

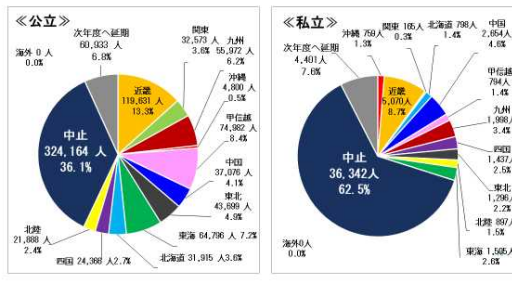
旅行方面別校数構成

※「中止」「次年度へ延期」を含む



旅行方面別参加人数構成

※「中止」「次年度へ延期」を含む



主な代替行事

- ・クラス別旅行
- ・バーチャル修学旅行
- ・遊園地、水族館等貸切見学
- ・芸術鑑賞、映画鑑賞
- ・テーブルマナー
- ・清掃活動
- ・校内宿泊体験
- ・スポーツ大会
- ・地元探索 など



全国の特徴的な動き

中学校、高等学校共に、コロナ禍1年目の令和2年度は、知識の無い正体不明のウイルスに対し、「**リスク回避**」を一番に考え、“動かない”、“近寄らない”、“触れない”という選択を執ることとなった。最終的に多くの学校が「中止」という判断に至り、学校生活の思い出作りとして様々な『代替行事』が実施された。

実施出来た高校3割、中学校5割の学校も、従来の修学旅行の形を執ることは出来ず、**移動時間の短縮、旅行期間の短縮、移動手段の選定等、3密回避**の対応をした上での実施となり、地元完結或いは、近隣県での実施、3泊4日の旅行期間を2泊3日や1泊2日若しくは、日帰りに変更、公共交通機関を利用せず、貸切バス等で移動等、極力人との接触を避けるなどの工夫がされた。この状況は、修学旅行受入地や、輸送機関に深刻な影響を与えた。

当然ながら、海外への修学旅行は実施されていない。

2021（令和3）年度 コロナ禍と修学旅行

—コロナ禍2年目の動き—

2021（令和3）年度コロナ禍と修学旅行

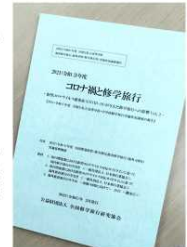
—新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が与えた修学旅行への影響VOL.2—
【2021・令和3年度全国公私立高等学校・中学校修学旅行実施状況調査】

令和3年度もコロナの収束は見えない。

コロナ禍2年目を迎えた教育現場の修学旅行への取組みを、昨年度の継続調査として行い、その変化をまとめた。

修学旅行の実施率は飛躍的に回復。

一方、その内容に関してはコロナ前の状態には戻っておらず、依然厳しい状態が続いている受入れ地や輸送機関、そして今後の課題を残すこととなった新型コロナウイルス感染症の影響について、これからの修学旅行を検証した。



2021（令和3）年度 コロナ禍と修学旅行

—新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が与えた修学旅行への影響VOL.2—
【2021・令和3年度全国公私立高等学校・中学校修学旅行実施状況調査】

I. 修学旅行実施率の回復

—経験値による「ウィズコロナ」での実施—

実施校数・実施率／参加生徒数・参加率

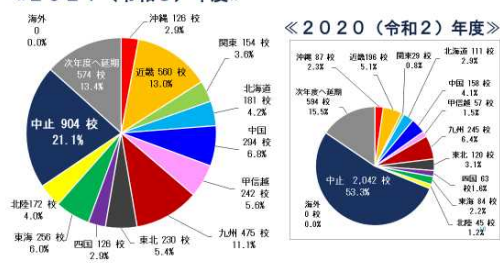
(校、人、%)

区分	年度	対象校数	実施校数	実施率	対象生徒数	参加生徒数	参加率
公立	R3	3,555	2,817	79.2	666,747	477,114	71.6
	R2	3,570	1,195	33.5	691,147	196,277	28.4
私立	R3	1,340	910	67.9	342,302	165,004	48.2
	R2	1,342	340	25.3	341,349	56,542	16.6
合計	R3	4,895	3,727	76.1	1,009,049	642,118	63.6
	R2	4,912	1,535	31.3	1,032,496	252,819	24.5

※対象校数は、文部科学省令和3年度学校基本調査高等学校（全日制・定時制・中等教育学校）による
※対象生徒数は、全日制第1学年と定時制第3学年及び専攻科、別科、中等教育学校後期課程第2学年の生徒数を表示した。

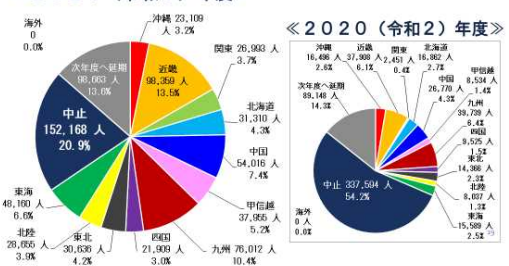
旅行方面別校数構成（公立）

《2021（令和3）年度》



旅行方面別参加人数構成（公立）

《2021（令和3）年度》

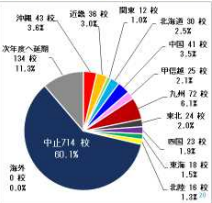


旅行方面別校数構成（私立）

《2021（令和3）年度》

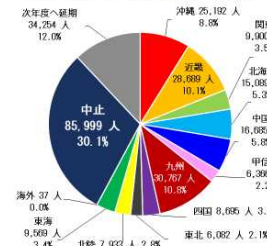


《2020（令和2）年度》

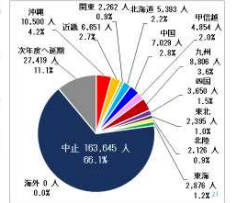


旅行方面別参加人数構成（私立）

《2021（令和3）年度》



《2020（令和2）年度》



実施校数・実施率／参加生徒数・参加率

(校、人、%)					
区分	年度	対象校数	実施校数	実施率	参加生徒数
公立	R3	9,230	8,134	88.1	988,676
	R2	9,291	5,435	58.5	964,663
私立	R3	778	410	52.7	80,403
	R2	782	201	25.7	78,081
合計	R3	10,008	8,544	85.4	1,069,079
	R2	10,073	5,636	56.0	1,042,744

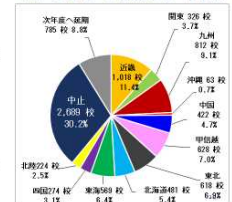
※対象校数は、文部科学省令和3年度学校基本調査中学校による
※対象生徒数は、第3学年の生徒数を表示した。

旅行方面別校数構成（公立）

《2021（令和3）年度》

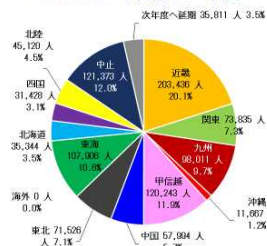


《2020（令和2）年度》



旅行方面別参加人数構成（公立）

《2021（令和3）年度》

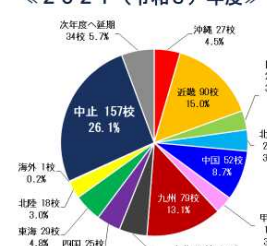


《2020（令和2）年度》

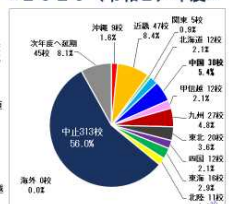


旅行方面別校数構成（私立）

《2021（令和3）年度》



《2020（令和2）年度》

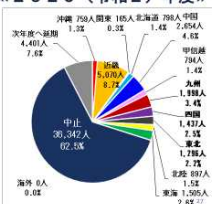


旅行方面別参加人数構成（私立）

《2021（令和3）年度》



《2020（令和2）年度》



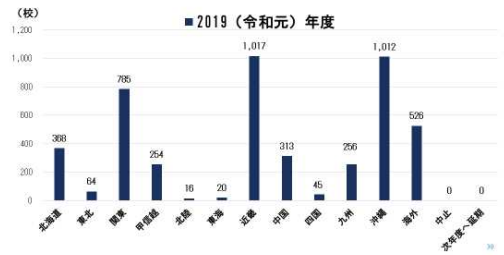
2021（令和3）年度コロナ禍と修学旅行 —新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が与えた修学旅行への影響VOL.2— 【2021・令和3年度全国公立高等学校・中学校修学旅行実施状況調査】

Ⅱ. 旅行方面の変化 —コロナ前とコロナ禍2年目の比較—

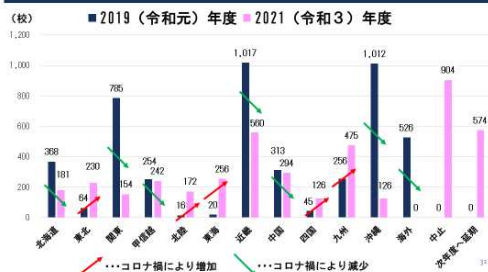
2021（令和3）年度
全国公立高等学校・中学校修学旅行実施状況

公立高等学校

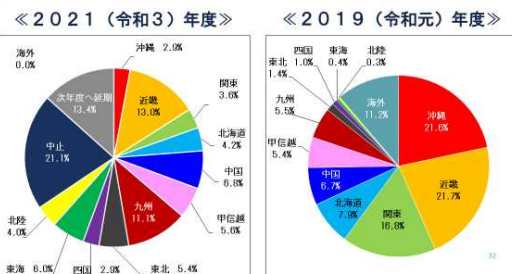
コロナ前（令和元年度）とコロナ禍2年目
（令和3年度）の旅行方面の変化



コロナ前（令和元年度）とコロナ禍2年目
（令和3年度）の旅行方面の変化



旅行方面別構成比の変化



2021（令和3）年度
全国公立高等学校・中学校修学旅行実施状況

公立中学校

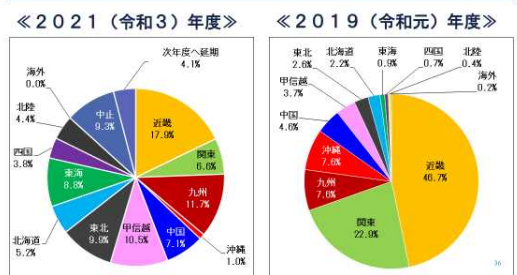
コロナ前（令和元年度）とコロナ禍2年目
（令和3年度）の旅行方面の変化



コロナ前（令和元年度）とコロナ禍2年目
（令和3年度）の旅行方面の変化



旅行方面別構成比の変化



コロナ禍2年目の修学旅行 (実施率の回復と旅行方面の変化)

中学校、高等学校共に、コロナ禍2年目は前年の経験を活かし、コロナ禍において、如何に修学旅行を実施するかという考え方に転換された。

日常生活から感染予防対策を徹底し、感染時における対応の準備も怠りなく、家庭、学校、受け入れ施設、輸送機関、旅行会社が連携を取り、万全の体制で実施を迎えるに至った。学校をはじめ修学旅行に関わる全ての人々の努力により飛躍的な回復を見せた。前年、修学旅行中止に伴い行われた「代替行事」（日帰り旅行等）の扱いを修学旅行とした学校が増えたことも実施率回復の一因と推察できる。

但し、コロナ禍での修学旅行実施であることが前提であり、リスク回避の観点においては、前年同様、移動時間の短縮、旅行期間の短縮、移動手段の選定等3密回避は重視され、各都道府県共に、コロナ前に行われていた旅行方面とは大きく変わっている。修学旅行受入地、輸送機関への影響は前年同様続いた。

【参考：航空会社への影響】 公立高等学校国内航空機利用修学旅行推移

															(枚数)	
	北海道	青森	岩手	宮城	秋田	山形	福島	茨城	栃木	群馬	埼玉	千葉	東京	神奈川	山梨	
2019	279	16	17	65	59	34	44	94	34	51	145	91	158	131	29	
2020	93	1	0	2	0	2	3	6	6	2	11	1	0	18	2	
2021	183	3	0	18	0	4	5	16	5	8	36	1	4	42	3	
駅名	鳥取	岡山	石川	福井	岐阜	静岡	愛知	三重	奈良	京都	大阪	兵庫	奈良	和歌山	鳥取	
64	58	4	31	29	67	70	65	34	37	28	102	99	4	22	6	
1	1	0	3	0	0	21	11	1	7	4	34	25	1	1	0	
7	4	0	6	0	0	27	21	1	6	11	44	41	2	1	0	
鳥取	岡山	広島	山口	徳島	高知	香取	佐賀	福岡	佐賀	熊本	大分	福岡	鹿児島	沖縄		
10	34	20	45	44	21	64	39	89	35	62	51	48	34	67	38	
0	0	7	1	0	1	0	0	5	0	14	1	2	0	1	0	
1	1	9	1	2	1	2	0	26	12	4	11	26	5	11	23	

【参考：航空会社への影響】 公立高等学校国内航空機利用修学旅行推移

	校数	人数
2019（令和元）年度	2,668	398,869
2020（令和2）年度	289	45,009
2021（令和3）年度	634	99,957

2019（令和元）年度、全国の公立高等学校の約75%が航空機を利用し、修学旅行を実施していた。コロナ禍において実施する修学旅行の遠隔地を避けた旅行方面への変容は、そのまま航空機利用の激減に繋がり、コロナ禍2年目も回復には至らなかった。

2021（令和3）年度コロナ禍と修学旅行 —新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が与えた修学旅行への影響VOL.2— 【2021・令和3年度全国公私立高等学校・中学校修学旅行実施状況調査】

Ⅲ. コロナ禍が残した課題

—人材不足—

コロナ禍によるレジャー業界の人材流出

《レジャー業界》

ホテル・旅館、レジャーサービス・アミューズメント、旅行・観光等

某転職サイトへの掲載社数は、各種業界全体では、新型コロナウイルスによる1回目の緊急事態宣言時期（2020年4月）で一時的に下落したものの、2020年8月以降は、ある程度安定したが、レジャー業界については、2020年1月をピークに一気に落ち込み、その後もその状況は続いていた。「宿泊業、飲食サービス業」従事者が賃金の下落に伴い転職や就職を希望するも業界内の求人もなく、他業界に転職。人材流出を引き起こした。今、旅行需要回復に伴い、人員確保が求められるが困難を強いられている。

人材流出の抑止と、人材の確保。人材育成が喫緊の課題となっている。

コロナ禍による観光・旅行業界の人材流出

■人材流出が引き起こす修学旅行への影響

- 1 貸切観光バスの確保
- 2 宿泊・食事・観光施設の対応の低下
 - ・臨時従業員（賃）
 - ・食の提供方法（時間、仕出し等）
 - ・アレルギー対応
- 3 学習ガイド（観光、歴史、平和等）の確保
- 4 民泊事業からの撤退、縮小
- 5 修学旅行取扱旅行会社の対応

☞観光・旅行業界挙げての対応が求められる

【情報】海外修学旅行

年度	公立高等学校		私立高等学校	
	校数	生徒数	校数	生徒数
2022（令和4） 年度実施予定	138	17,707	138	25,683
2018（平成30） 年度実施	440	75,052	522	93,829

※2022（令和4）年5月1日時点調べ

ウィズコロナにあって...

コロナ禍2年目を迎え様々な経験を積み、多くの修学旅行に関わる皆様の努力によって、修学旅行は確実に回復に向かっている。

令和3年度、旅行方面はコロナ前の状態には戻っていないが、コロナ前の旅行方面のバランスが、あるべき姿ということでは決してありません。日本国内、海外も含め素晴らしい学習素材は、あちこちにあります。

今回の、このコロナで唯一プラス面に働いたことは、学校をはじめ、修学旅行に関わる全ての人々が、改めて修学旅行の意義や在り方を考えたことではないだろうか。やむを得ない事情で、初めて訪れた場所に素晴らしい発見があったのではないだろうか。是非、これからの修学旅行を考える上での知識として残していただきたいと思います。

そして、受入側も人気の高い方面は、更なる研鑽を積んでいただき、コロナ禍で思わぬ特需を受けた地域は、一過性のものと捉えずに教育旅行の重要性を認識していただき、引き続き選んでもらえるための努力をお願いしたい。

「ウィズコロナ」を平時の生活として、これからの修学旅行は行われていくことになります。そして修学旅行はそこの中にあっても常に発展的な変化をしながら、更に素晴らしい文化として継承されていくと確信しています。

【記念シンポジウム】

「修学旅行、

その過去（きのう）・現在（きょう）・未来（あす）」



《 シンポジスト紹介 》

齊藤 正富（さいとう まさとみ）氏

文京区立音羽中学校 校長

千葉県習志野市出身。平成3（1991）年大学卒業後、東京都足立区の中学校教諭として教員人生をスタート。足立区・江戸川区の中学校に勤務した後、平成24（2012）年足立区立蒲原中学校の副校長。平成26（2014）年東京都公立学校副校長長期研修生（教育庁人事部職員課 課務担当課長）、平成28（2016）年東京都教育庁多摩教育事務所管理課管理主事を務める。平成29（2017）年4月東京都文京区立本郷台中学校 校長に就任。令和4

（2022）年4月現職に至る。本年（令和5）6月、第47代全日本中学校長会 会長に就任。

[国や地方自治体等の審議会・有識者会議等委員]

- ・令和2（2020）年 義務教育9年間を見通した指導体制の在り方等に関する検討会議
- ・令和3（2021）年 運動部活動の地域移行に関する検討会議
- ・令和4（2022）年 質の高い教師の確保のための教職の魅力向上に向けた環境の在り方等に関する調査研究会



宮田 明子（みやた あきこ） 氏

東京都立国立高等学校 校長

東京都出身。昭和 62（1987）年東京外国語大学卒業。

4 年間の金融機関勤務を経た後、東京都立高校教員（英語科）として 21 年間教壇に立つ。その後、副校長として東京都立立川国際中等教育学校（5 年間）、校長として東京都立成瀬高等学校（3 年間）、東京都立白鷗高等学校兼附属中学校（2 年間）を経て、令和 5 年 4 月より東京都立国立高等学校長に就任。

この間、立川国際中等教育学校では、実質的な修学旅行に相当するオーストラリア研修旅行、成瀬高等学校では台湾修学旅行を実施。さらに希望者参加型のオーストラリア研修旅行を立ち上げるなど、海外への教育旅行に対する造詣が深い。



宮崎 活志（みやざき かつし）氏

文部科学省初等中等教育局主任視学官

東京都出身。昭和 50（1975）年大学卒業後、東京都教員（中学校・国語科）として大田区、武蔵野市の 3 校に勤務。平成 2（1990）年から狛江市教育委員会、東京都教育庁指導部、千代田区教育委員会で指導主事を歴任、平成 12（2000）年、武蔵野市教育委員会指導室長。平成 15（2003）年から東京都教育庁指導部主任指導主事、東京都多摩教育事務所指導課長を務めた後、平成 18（2006）年、文部科学省初等中等教育局視学官。平成 24

（2012）年、武蔵野市教育長。平成 30（2018）年から武蔵野大学客員教授。令和 4（2022）年 4 月から文部科学省初等中等教育局主任視学官を務める。

中学校教員として、関西方面の修学旅行を多く引率した。また、武蔵野市教育長として市の「セカンドスクール」（小中学校の長期宿泊体験活動）を推進した。



越智 良典（おち よしのり） 氏

東洋大学国際観光学部客員教授 一般社団法人日本旅行業協会アドバイザー
広島県出身。昭和 50（1975）年早稲田大学政治経済学部卒業、近畿日本ツーリスト（株）入社。視察旅行を中心に海外旅行の団体営業を担当。

平成 19（2007）年常務取締役、平成 20（2008）年専務取締役の際に、全国修学旅行研究協会理事を務め、新型インフルエンザ対策や海外修学旅行危機管理セミナーを行う。

平成 23（2011）年（株）ユナイテッドツアーズ代表取締役社長就任後、八田與一など日本統治時代の先人の功績に光を当てた修学旅行の普及に務め「台湾観光貢献賞」を受賞。平成 25（2013）年一般社団法人日本旅行業協会理事・事務局長就任。

令和 2（2020）年からコロナ対策で、感染症対策ガイドライン作成や修学旅行実施対策、GOTOトラベルキャンペーンなどを実施する。令和 5（2023）年から現職。

〔著書〕『観光立国日本への提言』（成文堂・2016 年）早稲田大学商学部監修共同執筆

『旅行業概論-旅行業のゆくえ』同文館・2018 年）森下晶美編著共同執筆



《 ファシリテーター紹介 》

大江 近（おおえ ちかし）氏

和歌山県出身。昭和 50 (1975) 年大学卒業後、東京都教員 (社会科)、平成元 (1989) 年から東京都練馬区教員委員会指導主事・東京都教育庁指導部指導主事、東京都教育庁指導部主任指導主事、人事部管理主事・主任管理主事、東京都教育庁指導部義務教育心身障害教育指導課長、平成 19 (2007) 年から東京都渋谷区立上原中学校校長を歴任。その間、全日本中学校長会会長、日本中学校体育連盟会長、日本教育連盟会長、中央教育審議会各部会臨時委員等に就任。校長退職後、平成 25 (2013) 年から早稲田大学大学院客員教授。



現在は、一般財団法人教員養成評価機構評議員、東京都人権施策専門家会議委員、東京都教育会常任理事、全国修学旅行研究協会理事等に就任。

〔最近の主な著書・監修等〕

『答える力が必ず身につく合格ノート』(2017 年から 2023 年 教育開発研究所)

『未来をつかめ「平成ビジュアル図鑑 こんなに変わった」みんなの学校』(2018 年文研出版)

【 大江 】

皆様、こんにちは。ただ今より「記念シンポジウム」を始めさせていただきます。私は司会進行を務めさせていただきます大江近と申します。よろしくお願いいたします。

本日のシンポジウムのテーマは、「修学旅行、その過去 (きのう)・現在 (きょう)・未来 (あす)」ということでございます。修学旅行につきましてシンポジストの先生方の経験を踏まえ、改めて修学旅行の意義、魅力や課題、今後の当協会の在り方等について、様々な思いや、お考えを語っていただくと共に、それぞれのお立場から情報をご提供していただければと考えております。



さて、3 年間続きましたコロナ禍の影響による行動制限も解除され、やっと学校の教育課程が平常通り実施できることとなりました。東京駅に行きますと修学旅行に出発する生徒たちが集合しておりまして、先生方の意欲溢れる顔、生徒の皆さんの笑顔を拝見すると本当に嬉しくなります。修学旅行が、どの地域においても再開されたこと「よかったな」と心底思っているところであります。

それではまず、各先生方から自己紹介及び修学旅行の思い出や魅力について、お一人 5 分程度でお話しいただきたいと思います。

では最初は齊藤先生、宮田先生、宮崎先生、越智先生の順番でお願いします。では齊藤先生お願いいたします。

1. 私の修学旅行

【 齊藤 】

改めまして皆様こんにちは。全日本中学校長会会長、そして東京都文京区立音羽中学校校長を務めております齊藤正富と申します。先程は過分なご紹介もいただきまして大変恐縮しております。



本日は修学旅行について「修学旅行、その過去（きのう）・現在（きょう）・未来（あす）」をテーマにしたシンポジストと伺っております。まずその過去というところで、もう 40 数年前に遡りますが、私ごとですが、中学校の修学旅行は奈良京都に参りました。当時は今のような班行動が一切なく、バスガイドさんが持つ旗の後をついて奈良の大仏を見ました。歴史の資料集などでは見ておりましたが、見上げるような大仏の大きさに圧倒されたことを今でも覚えています。金閣寺には行きません

でしたが、銀閣寺がとても渋い建物だなと中学校の時に既に感じていました。高校時代は北陸とそれから飛騨に参りまして、東尋坊、あるいは金沢、そして飛騨高山や合掌造りの白川郷などに行って、友達と楽しい時間を過ごし、なおかつ合掌造りの見事な建築に感動した覚えがございます。

今は、校長という職を仰せつかっていますので、生徒を引率しながら修学旅行に同行いたしますが、何といっても「行ってきます」と家を出た状態と同じ状態で「ただいま」と子供達に言わせることができます。これが最低限のミッションだと考えています。尚且つ同じ状況で「ただいま」と帰宅させた上で、更に「こんなことがあったんだよ。こんな 3 日間だったよ」ということを、話ができるような修学旅行にできればよいと思って携わっています。

これまで印象に残っていることは幾つもありますが、特に現在の高校 3 年生について触れさせてください。当時所属をしていた中学校では、修学旅行は秋開催を予定しておりました。ところが、コロナの影響で、延期をせざるを得なくなった。「いつやるんだ？」ということで、3 月に延期をしたのですが結局は実施ができませんでした。

その際には、当時の 3 年生は「何とかやらせてほしい」と私のところに直訴に来まいりました。もちろん私もそれに応えたいという気持ちで教育委員会等とも折衝していたのですが、結局は叶わずということになりました。最終的に某遊園地に卒業前の代替行事を実施することができましたが、それさえも開催が危ぶまれたため、文京区には徒歩で移動ができて、子供達が思いっきり遊べる遊興施設がございます。最悪の場合には、そこへ行って半日思いっきりボウリングをやらせてあげよう、もちろん私もやろうと思っていました。また、現在の高校 2 年生につきましては、卒業式の 1 週間前に、やはり秋開催を延期しましたが、こちらは実施をすることができて、ホッとしたことを覚えております。

さらに、現在の中学校 3 年生は、全日中の会議がございました関係で修学旅行に同行できず、行程の初日朝に東京駅で見送って、最終日の夕方に東京駅で迎えたことも印象的でした。生徒も楽しんでくれましたし、同時に私は副校長の育成ができたなというところで、自分自身を納得させているところでございます。

今日は様々なテーマがございますので、皆様といろいろと勉強させていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

【 大江 】

どうもありがとうございました。では、宮田先生お願いします。

【 宮田 】

改めまして、こんにちは。国立高等学校長の宮田と申します。私は高校という立場でお話しさせていただきますが、まずは自分自身の修学旅行の思い出というところと、学生時代も真面目ではありましたが、ちょっとやんちゃなところもありまして、自分の修学旅行の一番の思い出は？と聞



かれたとしたら、やはり先生に怒られたことかなと思います。夜に部屋を移動していたところを先生に見つかって、部屋の前に連れていかれて正座させられたことが今でも一番の思い出です。

またその後に更にちょっとした後日談がありまして…。実はそのことを褒められたという非常に不思議な経験もしました。卒業する時に「宮田が修学旅行の夜に違う部屋に行っていただろう。宮田にも、そういう友達関係があるということを知って先生は嬉しかったぞ」と言われたのです。「あれ、そんなに堅物に思われていたんだな」と驚くと同時に、自分の演技力に「すごいな、私って。そんなに真面目に見られるぐらいうまく振る舞っていたんだな」と愉快に思ったという、そんな思い出があります。後日談があったからこそ、なおさら、それが一番の思い出になっているのだと思います。

自分が教員になってからですと、やはり生徒達も修学旅行で訪問した場所というよりは、そういう友達との関係とか、「宿泊行事」という点での思い出が大きいのだろうと感じます。というのも、高校を卒業して今はもう 37～8 歳ぐらいになっている教え子達と、この前久しぶりに会って食事をしたのですが、その時にやはり修学旅行の話になりました。私が夜の見回りをしていた時には、「おい、宮田が来るぞー！」というふうに、廊下伝いにみんなで伝言していったそうです。その時はおそらくお酒か何かを持ち込んでいたのだと思うのですが、生徒達はそれをどうやって隠そうかとバタバタしていたようです。結局私がその部屋に辿り着いた時には何とか繕うことが出来たわけですが、「でも先生、あのとき分かっていたよね？」と、今になって彼らは笑っていました。私も「それは言わないことにしておく」とだけ言葉を返しておきました。やはり、そうやって先生達の目をくぐり抜けて何か小さな冒険をやったというのが高校生ぐらいの修学旅行になると一番思い出に残ることなのではないかなと感じます。

生徒達も高校生になると学習も深まっているので、修学旅行で訪ねた場所については、もちろん感動したり、色々と学ぶことはあるのだと思いますが、やはり一つの学年全体が全く違う場所にそっくりそのまま移動する修学旅行というのは本当に異次元の世界です。生徒 8 クラスと 12 人ぐらいの先生達と一緒に移動して、学校の教育活動がそのままいつもとは違う場所で行なわれる。それも 24 時間行われるというのは、とてつもない異次元というか、平常とは全く違う空間になるので、そこでの生徒達の高揚感と先生達の指導の苦労というのは大変なものです。私自身、中学生の時に、夜中に先生方に迷惑を掛けたことは、今の自分の立場になって反省していますが、修学旅行という異次元の場においては、そういう小さな冒険のようなことも特別な大きな思い出として残るものだと思います。

一つの興味や関心で集まった一部の生徒達だけで行く部活動の合宿とは全く違い、一つの学年の生徒全員が参加するということには大きな意義があると感じています。今日は先ほどの全修協報告も含めまして、すごく勉強になりました。私も今日学んだことを現任校での修学旅行等にも活かしていきたいと思っています。今日はよろしく願いいたします。

【 大江 】

どうもありがとうございました。では、宮崎先生お願いいたします。

【 宮崎 】



改めましてこんにちは。宮崎でございます。私は元々中学校の国語の教師でございました。東京の大田区と、それから武蔵野市で 3 校に勤務をしました。勤務自体は短いのですが、14 年間勤務して、そのうち 3 年生を担任することが比較的多くて、たしか 7 回受け持ったと記憶しております。連続して 3 年の担任を持つようなこともありました。

市で指導主事をしている時にも市内の中学校の修学旅行に一度同行

いたしました。引率みたいなものですが、ちょうどその時、新幹線が台風の影響で、一晚、線路上に停まってしまうという状態になりまして、生徒の安全管理をした記憶もあります。勤務した期間のわりには修学旅行を引率する機会は多かったと言えるかもしれません。

自分自身が生徒の時の修学旅行の経験もありますけれども、あまりにも昔のことですごくございますので、もう記憶はほとんど残っておりません。間違っただけを言ってもしょうがないかなという感じです。と言うよりは、教員になってからの修学旅行の記憶が、自分自身の体験の記憶を上書きしていくような、そんな感じになっております。

私が中学校の教員だったのは、昭和 50 年から昭和の終わり頃まででございました。当時、人気のあったテレビドラマは水谷豊さん主演の「熱中時代・先生編」とか、それから武田鉄矢さん主演の「3 年 B 組金八先生」など、学校を舞台にしたものが多く、人気がございました。

特に 3 年 B 組金八先生の第 2 シリーズ。これは昭和 55 年から 56 年の放送でございますが、校内暴力やいじめなどを取り上げて高い視聴率を挙げていました。当時の文部省からも「児童生徒の非行防止について」という通達が出されたり、「荒れる教室」という言葉がマスコミで連日報道されたりするなど、特に中学校は生徒指導の面でかなり危機的な状況にあったと言えると思います。全国に報道される暴力事件や深刻ないじめ問題は、やはりかなり多かったところでございます。

こうした時に修学旅行の引率をするということで、教職員には、やはりある程度緊張感がありました。ちょうど宮田先生が叱られていた頃がそうですね。当時は先生方もちょっと過剰な指導になったところもあるかもしれません。

私のわずかの経験でも、いろいろな心配がありました。

例えば、集合場所に別人のようになって現れる生徒。「えっ？髪の色が違う、服装が違う」とかありましたね。それから近くの場所で集合している他の中学校の生徒とにらみ合う生徒。「〇〇を飛ばす」とかいう言葉を使っていました。

当時は、既に関西方面へは新幹線を利用いたしましたけれども、一般の乗客や他校との、いわゆる「混乗」になる車両というのは厳戒態勢になる。宿舎や見学地での逸脱行動の警戒や、土産物の購入などで夜間に繁華街に出る場合もありまして、その時は心配な事案も起きたりしました。生徒の就寝時間も教員は廊下で不寝番。いったい何の為に修学旅行をしているのかなという気持ちもございました。

しかし、こうして過ごした 3 日間であっても、生徒たちにとってはとても貴重な体験です。「旅行」というものに初めて行くという生徒もいました。家族と離れて過ごす時間というもの、大人への大切なステップかもしれません。

就寝時間の「枕投げ」よく聞きます。私はあまり実物を見たことないような気がしますが、「枕投げ」に代表されるような、無意味だけど何か意味のある時間。我が国の大きな文化遺産である清水寺の舞台や、東大寺の大仏様も、修学旅行の時にしか行かなかったことがないという人もたくさんいると思います。

何より、今、宮田先生もおっしゃいましたが、非日常の空間で同じ世代の仲間と同じ体験をする時間は生徒一人一人にとってかけがえのない時間でした。私たち引率する教員の安全管理や生徒指導の努力は、そんな大きな教育的価値を支えるものだったと思います。しんどかったけど、やりがいのある教育活動が修学旅行だったという思いです。

私の教えた生徒達は、既に還暦に達した人たちもいます。コロナ禍で今年は久々に同窓会が開かれました。出かける前に卒業記念アルバムを見ると、大きな部分を占めているのはやはり修学旅行です。

中学校3年間のうちのたった3日間が、こんなにも大きな位置を占めるんだなあという思いを新たにしました。以上、引率の思い出が中心になってしまいました。ありがとうございました。

【 大江 】

どうもありがとうございました。では越智先生お願いいたします。

【 越智 】

私はちょっと場違いな人間で、3名の皆様方は本当の教育界バリバリのご出身なんですけど、私は経歴にもある通り、近畿日本ツーリストの出身で、その後業界団体を経て東洋大学で3年間生徒を教えてきたという経歴なものですから、また違ったお話ができるのかなというふうに思っています。



あまりにもちょっと昔話になってしまうもので、もう修学旅行の思い出と言われてもバスガイドさんが綺麗だったことぐらいしか覚えていないんですよ。九州一周の旅行だったんですけど宮崎交通さんだったかな？すごくガイドさんが綺麗で歌がうまくて、その思い出しか残っていません。

むしろ、会社に入って仕事としての旅行の方がやっぱり思い出があって、実は内定をもらった後にアルバイトで修学旅行の添乗を4回やらないと内定を取り消すって言われたんですね。それで当時、大宮ユースで4回修学旅行の添乗をしました。バイト代は背広と革靴で全部消えたので、厳しい会社だなと思いました。

その後はどちらかというと、海外旅行の団体の営業をしていましたので、修学旅行の仕事そのものはなかったんですが、2008年に常務から専務になったあたりのところで全修協の理事をさせていただきました。2009年に新型インフルエンザの事件があって、今回もそうなんですけど、いきなり大阪、兵庫あたりから全校休校になって、行き先としての京都が全滅しまして、36万人取り消しになったという事件がありました。その際に延期をしてでも実施をしてほしいと、いろいろな働きかけをして何とかうまくいって、再開の臨時列車を東京駅で見送りました。その時骨身にしみて思ったのは「修学旅行は会社の屋台骨を支えているんだ」ということ。これは本当に大事な仕事なんだなということをつくづく感じたというわけです。

その後、子会社のユナイテッドツアーズで台湾の修学旅行を増やしたりもしましたが、何よりも今回のコロナの時、日本旅行業協会の事務局長をしておりましたので、業界の窓口としてコロナ対策の陳情をしました。

その5つの陳情項目の3番目をお願いした事が「修学旅行は取り消しをしないで延期をして実施をさせてほしい」ということで、これが2009年の新型インフルエンザ事件のときの実績もあって、わりとスムーズに実現できたのが非常によかったと思っています。

あの「Go To トラベル」の対象にもさせていただいたので、その辺のお話を後ほどさせていただこうと思っています。私、東洋大学国際観光学部で就職指導委員長もしていましたので、旅行会社に勤めている生徒が結構多いんですね。修学旅行の営業をしているOB・OGもたくさんいますので、何とか夢のある仕事として、彼ら彼女たちがこれからも活躍できるようにして欲しいというのが一番の願いです。以上です。

【 大江 】

はい、どうもありがとうございました。とってもあたたかい話を頂戴して、何かホっとしたような気分

です。昔を思い出しました。“何かを飛ばす”って言っていますが多分、「ガン」を飛ばすんですかね。いつも修学旅行に行くと緊張したことを覚えています。

それでは次に、資料を見ますと修学旅行の始まりというのは、1886年（明治19年）、東京師範学校の難しい言葉ですが「長途遠足」という、要は距離が長い遠足を長途遠足と言ったらしいんですが、これが最初だと。その後、日帰り遠足において宿泊を試みたり、場所が遠隔地になったり、さまざまな取り組みが行われていた。明治時代後半には海外への修学旅行も実施された。様々な文献を見ますとそんな記録もあるわけです。

更にその頃から史跡や文化遺産の見学など、教育旅行として位置付けられ、鉄道の団体割引料金制度も導入されたということです。現在に至りましては、小学校、中学校、高等学校それぞれの段階に応じまして、各教科等との関連付けとか、あるいは自然保護とか文化財尊重とか集団行動、共同生活とか教育的な意義が一層重視をされてきたわけであります。

現行学習指導要領に、学校行事の5項目の一つ「旅行・集団宿泊的行事」として書かれていますが「平素と異なる生活環境にあって見聞を広め自然や文化などに親しむとともに、よりよい人間関係を築くなどの集団生活のあり方や公衆道徳などについての体験を積むことができるようにすること」とされております。

それでは、シンポジストの先生方に修学旅行の教育的意義、学習効果や課題等について、お言葉を頂戴したいと思います。では今度は宮田先生から順番にお願いいたします。

2. 修学旅行の教育的意義

【 宮田 】

はい。この教育的意義という点についていうと、修学旅行は教育的行事、学校行事ですので、全てが教育的側面を持っており、何か一つとか、そこだけを切り取るというのは非常に難しいと思います。

先ほど、色々な場所や地域というのが出ていましたが、やはりどこを選ぶかによって、そこに関わる教科、学習の全てが変わってきます。中学と高校とでは文化が違うのかもしれませんが、高校の場合、学年によって修学旅行の行き先が変わってしまうようなことがあります。私は、それはあまり良くないと思っています。学校として修学旅行をある場所に決め、こういうことを学ばせる、こういうことを学んでほしいという基本がやはりあるべきですし、その学校として生徒達に身に付けさせたいものがしっかりあるべきだと思いますので、目的地としてどこを選ぶかというのはとても大事な事だと思います。

先ほど、コロナの状況によって目的地を近県にしたというお話がありました。そして、新しい場所に行くことによって、新しい発見が、素晴らしい発見があったのではないかというお話もありましたが、それはコロナに付随する本当に素晴らしい教育的価値だったのだらうと思います。

例えば、私、この4月に現任校に着任しましたが、その前は中高一貫校にいました。そこは中学の修学旅行と高校の修学旅行とがもちろんあるわけですが、高校の修学旅行ではコロナ前にはシンガポールに行っていました。でも、当然ながら海外ですので、この3年間実施出来ていませんでした。何とか延期、延期を重ねて、海外は無理だったものの、昨年度に高校3年生は大阪京都方面、高校2年生は北陸方面ということで、何とか国内を目的地として2個学年が同じ年に修学旅行を実施しました。ところが、目的地を北陸方面に決めた学年というのが、参加率が非常に悪かったのです。やはりシンガポールに行くというのを一つの目標にして入学したという生徒達もいたので、国内なら行かないというか、当初はがっかりしたようです。また、北陸方面というのが高校生には馴染みがない地域だったのか、ちょっと参加率が低かったという残念な結果になりました。でも、参加した生徒たちの反応は素晴らしくて、ライトアップされた

合掌造りとか、錦繡の山々をバックにした合掌造りの景観、いわば日本の原風景のようなものを見て、もう涙が出るほど感動したと語っている生徒達がありました。これはまさに、さきほど話題に出ていたような新たな発見というのがやはりあったのだろうと思いました。恐らく大部分の生徒達にとってみれば、北陸にその年齢で行くということはないと思います。ですので、そういう発見を生徒達にさせてあげられるという修学旅行の教育的側面というのは素晴らしいと昨年度は改めて思いました。また、その場所に関係する、例えば社会や文化等について調べたり、発表したりするという周辺の学習活動も伴うものですので、そこを本当に充実させれば色々なことを学習させられるという点も大きな教育的意義だと思っています。

修学旅行は、基本的には一つの学年全員が行くという拘束力のある行事ですが、それはやはりプラス面もマイナス面もあって、一番辛いのは宿泊の部屋決めとかグループ分けとか、そういう時になかなかグループに入れなかったり入れてもらえない生徒が出るというところですね。豊かな人間関係を育むということも、教育活動のなかで取り組んでいかなければならないわけですが、そういう難しい人間関係にどう対処していくかという点も、修学旅行が原則自由参加ではないことからくる難しさだと思っています。しかしながら、これから社会に出て行った時に、グループを作るとか、色々な人と良好な人間関係を育むとか、様々な人達とも宿泊を共にして3泊4日なりの期間を過ごす術を学ぶというのは、学校でなければ、その年代でなければ経験出来ないことだと思っています。社会人になってまで、気の合わない人と宿泊の旅行と一緒に行くなどということはありませんから。修学旅行は、そういう貴重な経験を積むことが出来る教育活動の場なわけですから、教員もそれをうまくサポートしながら、どうやって人間関係を築いていくかということも教えていかなければいけないとつくづく感じています。難しいですけども、やはり教育現場としては、こうしたこともしっかりやっていかなければいけないし、修学旅行はこうしたことをしっかり学ばせることが出来る貴重な学習の場だと思っています。

【 大江 】

どうもありがとうございました。それでは宮崎先生お願いいたします。

【 宮崎 】

修学旅行の教育的価値についてということですが、これも皆さんもご存知のとおり、修学旅行は、先ほどから話題になっておりますように、学習指導要領では、特別活動の中の学校行事の4番目の内容でございます「旅行・集団宿泊的行事」に位置付けられております。ところで、現行の学習指導要領では、各教科等の目標に「見方・考え方」が位置付けられました。それはその教科等の特質に応じた、その教科等ならではの物事を捉える視点や考え方ということでございます。言わばその教科等の教育的意義の中核をなすものといえます。また、現在進められている授業改善の柱である「主体的・対話的で深い学び」の「深い学び」の重要な条件でもございます。

特別活動の特質に応じた見方・考え方は、「集団や社会の形成者としての見方・考え方」とであるとされております。学習指導要領の特別活動の目標の冒頭に書かれているこの「集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ」ということは、本日の大会の主題にもなっております「学びの集大成」という言葉がありますが、つまり、さまざまな教科等で身に付けた見方考え方を総合的に働かせながら、自分自身や集団、社会の問題を捉え、よりよい人間関係の形成、よりよい集団生活の構築や社会への参画、及び自己の実現に向けた実践に結び付けることであるとされております。お聞きいただくだけではちょっと分かりにくいかもしれませんね。

このような特別活動の「見方・考え方」を修学旅行に当てはめて考えますと、修学旅行の事前学習や旅

先での見学や体験活動、事後学習などの過程で、これまでにいろいろな教科などで勉強してきた成果がたまって、感動や体験の質が高まり、自然や社会、文化などのさまざまな価値に気付いたり、その課題が見えてきたりする。そのような学びが、自分一人だけでなく、仲間や先生、関係者との関わりの中で行われることで、これから進もうとする上級学校や社会での自分自身の在り方や、他の人たちとの関係の在り方に関心や展望、自信、勇気ややる気が高まる。「集団や社会の形成者としての見方・考え方」を働かせた修学旅行は、そのような子供たちの成長の機会になることが望ましいということになると思います。

しかし、こうした修学旅行は、これまでも全国の学校で行われてきたものでもございます。平成 29 年 3 月 31 日付けの小中学校学習指導要領改正の通知の中では、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」という項目の中で、「我が国のこれまでの教育実践の蓄積に基づく授業改善の活性化」とか「これまでと全く異なる指導方法を導入しなければならないなどと浮足立つ必要はなく、これまでの教育実践の蓄積をしっかりと引き継ぎ」などという言葉が述べられておりまして、これまでの指導の取り組みとその成果を継続するよう求めているわけでございます。しかしながら、今、あえて、特別活動の特質に応じた見方・考え方に留意することで、改めて修学旅行の教育的意義を明確にすることができるのではないかなと考えております。私から以上です。ありがとうございます。

【 大江 】

どうもありがとうございました。それでは越智先生お願いいたします。

【 越智 】

大江先生から最初に色々な歴史的なお話をご紹介いただきました。私も今回いい機会なので、いろいろな論文を読み返してみました。修学旅行、教育旅行というのは、随分研究論文が多いんですね。その中に、近畿日本ツーリストの社長だった太田孝さん。ちょうど私が役員だったときの社長ですけども、東海大学の教授になって博士号を取った論文が修学旅行の研究なんですね。その論文を改めて読み返し、気付いたことが多かったので紹介します。

太平洋戦争が終わった後、すぐその翌年に米を持参して修学旅行が再開したということなど、すごい力だと改めて思いました。学習指導要領で戦後、学校行事に規定されたのは 1958 年ですが、その 3 年前に結構色々な事故があって、宇高連絡船（紫雲丸）が高松の港に入る直前に沈没して 100 名以上の修学旅行生が亡くなっています。私は父がちょうど当時運輸省の船舶安全担当で、家に写真がいっぱい残っていて、こんな悲惨な事件があったということを教えられていました。

1958 年の学習指導要領は教育活動と同時に安全配慮をしっかりしなさいという指導だったんだろうなと思います。その意味で、旅行会社の役割も非常に責任が重たいということを改めて思い直したわけです。

学習についてはもうお三方のお話で十分だと思うんですが、やはり時代のニーズを反映して目的地もテーマも変わっていると言えると思います。

歴史文化であれば京都・奈良でしょうし、平和学習だったら広島・長崎・沖縄となりますでしょうし、国際人育成ということになれば、海外修学旅行というようになってきて、今は 2017 年の新しい学習指導要領の中で持続可能な社会の担い手づくりというところが一番注目されているので、今日の各地の受け入れ先の皆さんの資料を拝見しましても、もう間違いなく全部「SDGs」にちなんだ企画提案が盛り込まれています。

ですから場所というよりも、その場所で SDG s の観点で何ができるのかということが大事になっています。ただし、題目だけ書いてあって、中身は旧来のままというものも散見されるので、もっと深く、北

海道で今年アドベンチャーツーリズムの世界大会も行われますし、色々な切り口でその地域を深掘りして企画提案できると思います。それについては、旅行会社の役割ももっと大きくなると思います。受け入れ先の皆さんと一緒に新しいプログラムをつくれば、修学旅行の学習効果も一層高まるんじゃないかと思っています。以上です。

【 大江 】

どうもありがとうございました。では齊藤先生お願いします。

【 齊藤 】

はい。改めまして現場の話に戻ってしまいますが、私は資料にもありますように、平成3年の4月に教員になりました。担当の教科は社会科でございます。新採で、いきなり3年生の副担任になり、先輩からは社会科ですし、修学旅行がありますので、修学旅行の企画を担当しなさいと言われました。もちろんサブでの担当でしたけれども、そのグループに入って、当時メインの担当の先生と学校が終わった後に当時だから許されたと思うのですが、場所を移しまして、個人で所有していたワープロを持ち込んで修学旅行のための文書、要項あるいは生徒達に配るさまざまな班行動の企画書とか、そういったものを作っているいろなお話を聞いた覚えがあります。

更に、私は生活指導畑の経験しかございません。学校の中に教務という分担があったり、進路指導という分担があったりということは御存じかと思います。ずっと生活指導、主任等を務めておりましたので、やはり修学旅行、校外に子供達を引率して行く場合には、かなりの緊張感を持っていました。先程「行ってきます」といった状態と同じ状態で「ただいま」と言ってもらうということが最低限と申しました。そのような意味でも修学旅行には特別な思いを持っていました。ただ、だんだんと経験を重ねて、自分が企画をする立場から、自分よりも経験の短い教員を修学旅行の主担当にさせて、そのサポートをするようになった時に、自分なりの経験を伝えながら、一緒に学習指導要領をしっかりと読み込んで、どこに当てはまるかということなどを考えさせていくような立場になったと思います。

更にはこの修学旅行というのは、1年生の秋に日程が決まります。場所も決まります。そこに保護者の協力を得る。つまりは日程を決める、あるいは行き先を決める際に保護者の意見を参考意見として相当なウエイトで取り入れていくということを今はどの学校でもやっていると思います。

また、修学旅行の企画をしていた時にとっても印象に残っていることの中で当時の校長先生がバスの座席はきちんと決めて守らせなさいと言っていたことを覚えています。「なぜですか？」とお尋ねしたところ、辛くて言いたくなかったお話かもしれませんが、校長先生が教員だった時、修学旅行に引率をしていた際にトラックと乗っていたバスが衝突して、子供達が犠牲になった事故があったそうです。事故の補償等について訴訟になった際、当初決めていたバスの座席を移動していた生徒がおり、担任が座席位置を守らせていれば、被害の状況が変わっていたのではないかが争点とされて、校長先生も訴訟の中で相当辛い思いをされたというお話をしてくださいました。ですから、そういったことも踏まえてさまざまな事前の決まり事につきましては、しっかりと決めるようにということを今でも校長の立場として教員には指導していますし、また自分自身も教員の時代からそれについては実践をしていたというところがあります。

また、修学旅行での学びの一つに集団行動について体得させることがあります。このことは家庭や地域では経験させることの難しい分野だと思います。なぜなら、楽しいとか面白いとかやりたいことをやるばかりが修学旅行ではないからです。もちろん、それらのことは当然、要素には入っていますが、一人一人

の生徒のさまざまな要望が重なった場合に、当然そこで衝突が起きる可能性があります。その時には自分の楽しい、やりたい、面白いではなくて、みんなの楽しい、面白い、やりたいを優先して考えなければいけないことを学ぶ機会でもあるのが修学旅行だと思います。

参加するみんなで楽しもうといったことで、いわゆる社会性を身に付ける。その他にも身に付けられることはたくさんありますが、そういった意味ではとても貴重な学校行事である、やはり私も学校経営上、非常に高い位置でこの行事の運営については考えているというのが本音でございます。以上です。

【 大江 】

どうもありがとうございました。

修学旅行への特別な思いというのは、我々教師だけではなくて、旅行関係業者、あるいは受け入れ地区の皆さんもおそらく特別な思いがあるんじゃないか。そんなことを常々思うわけであります。

今、お話を聞いていまして、生徒にどこを見せようか、どういう行程にしようか、又、昼間は疲れさせて夜早く寝かせようかとか、いろいろ考えながら修学旅行を計画したようなことが記憶にあります。岩瀬理事長が、よくおっしゃるんですが、「修学旅行は日本だけの文化なんだよ」と。おそらく日本の学校に在籍した人ならば、全ての人が修学旅行を経験してきたんじゃないか。そんなことも言えるんじゃないかと思うわけです。

行った場所とか、感動した場所とか先生に叱られた思い出とか、家族で共通の話題になるって話も聞いたことがあります。最近では航空機の使用とか、民泊体験とか地域産業体験、海外旅行と教育旅行として益々多様化してきているわけであります。

各学校の実施要項を拝見しましても、内容の中に「優れた文化の継承」とかですね、「新しい文化の創造」という言葉が入っており、より高度な意義を目標として修学旅行を実施する学校がほとんどになってまいりました。

それでは、シンポジストの先生方から修学旅行の文化的側面についてお話を伺いたいと思います。それでは、今度は宮崎先生からお願いいたします。

3. 文化としての修学旅行

【 宮崎 】

文化的側面、ちょっと難しいかもしれませんが、修学旅行そのものが一つの日本の文化であって、そこにどんな価値があるかということを中心にお話しできたらと思います。

修学旅行では多くの場合、特色ある自然や歴史的な文化財、今日的な社会文化施設などの見学や地域の伝統技術の体験などが行われることが多いと思います。また、平和とか環境問題、持続可能な社会などについて考える機会にしたいという、そういう修学旅行も増えているのではないかと思います。私は今日、心に残っている新聞の記事を2つ紹介したいと思っていますが、その一つに触れてお話ししたいと思います。

10年前、もう随分前ですが、10年前の平成25年4月13日付の読売新聞に、今から117年前、明治39年に行われた「中等学校合同満州旅行」のことが、「昭和時代」という当時の連載記事の第3部の中で紹介されていました。これは先程、大江先生が修学旅行の歴史的経緯などもお話しされましたが、海外に行くような修学旅行も行われ始めていた明治の後半ということになりますね。その記事には戦前、師範学校や中学校、これはいわゆる「旧制中学」ですが、師範学校や中学校などの間で満州修学旅行が盛んに行われ

た。そのきっかけになったものだと紹介されているものです。

その明治 39 年は、日露戦争終結後の日露講和条約、いわゆるポーツマス条約が調印された翌年にあたります。これは陸軍省と文部省が共催した旅行で、東京府立一中、これは現・都立日比谷高校でございませう。それから府立二中、これは立川高校と、それぞれ今も残っておりますが、三中、四中などの生徒が参加したと書いてあります。7 月 13 日から 8 月 12 日まで、かなり長い期間ですが、大連・旅順・奉天など主に日露戦争の戦跡を見学しました。その際、旅順港、これは旧ロシア太平洋艦隊の基地ですね。これを見下ろす激戦地である皆さん御存じだと思いますが、「二百三高地」。ここを訪れた 4 年生、当時の中学校は 5 年制でございませうので、4 年生は 15 歳から 16 歳の方です。その一人が残した作文の一部が紹介されていまして。ちょっと読んでみます。

「枯れ枝の如きもの散乱せり、拾いみれば人の骨なりき。…（略）あわれや、生きて異域の客となり、死しては白骨永く雨風に任ず」という文章でございませう。「あわれなことだ。生きているうちは異国の客人（まろうど）となり、死んで後は白骨を永く雨や風にさらしている」というような意味になるかと思ひます。出典は「日比谷高校百年史」と書かれています。

当時、国内には戦勝ムードが広がっていました。この旅行を主催した陸軍省や文部省の目的はわかりませんが、この生徒は激戦の地に立って、戦争の悲惨さ人の命のはかなさやむなしさを語っています。現在でも、平和の大切さを考えることを、修学旅行の目標の一つにして行われることは少なくないと思ひます。やはり直接その場所に行ってみて、初めて自分の感情も動かされるような深い学びが行われることは、100 年前も同じであったのではないかと思ひます。時代や社会の状況は変わりますが、人間にとって本当に大切なものを学ぶことに、それほどの違いはないのではないかと思ひます。

高校の段階では、外国でも修学旅行が行われています。また、コロナ禍から復活し始めているのだなということ、先ほど石原部長のお話からも知ることができました。

義務教育の段階も含めてという点では、我が国の修学旅行は先ほどから大江先生も力説されていますように、その規模や内容という点で世界に誇り得る教育活動でございませう。修学旅行そのものが日本の大きな文化になっていると言えらると思ひます。私からは以上でございませう。

【 大江 】

どうもありがとうございました。では越智先生お願いいたします。

【 越智 】

はい。私の方から幾つかお話ししたいんですが、まず修学旅行というのが教育活動だという面と同時に、自腹で親御さんが積み立てをして旅行するという側面もあります。それで親が子に体験させたいという行事としてずっと伝えられてきたという点について、これも太田さんの論文には、どうして親がお金を払って子供たちに参加させたいのかというのをインタビュー調査したデータがあります。それを一言で集約すると、日頃味わえない外に出て「非日常体験をすることで一つの通過儀礼を体験させたい」ということに集約されると思ひます。それぐらい日本人の文化に定着してことがわかります。太田さんに言わせると周遊旅行のルーツも修学旅行にあって、日本人には DNA として植え付けられてきたというようなことが指摘されています。なるほどという感じがします。

それでは他国ではないのかというと、実は韓国でも修学旅行は行われています。これは日本が統治をした時代に定着化し、戦後も引き継がれています。それで今回、韓国の皆さんに色々聞いたんですが、儒教精神を学ぶ為に孔子の故郷を訪ねるツアーや慶州の歴史を学ぶツアーなどが実施されていたんですが、セ

マウル号の転覆事件以来、日本式の全員参加型の旅行は下火になっているようです。

2016 年に国連の観光文化会議がアンコールワットで開かれ、世界遺産の保護を意識しながら観光するという旅行スタイルを、新しい持続可能な旅行スタイルにしようという話をユネスコと国連観光機関が共同で決議しました。その時のシンポジウムで私は日本の修学旅行をアジア各国でも採用していつてはどうかと提案しました。学生の時に世界遺産の保護や意義を学びながら旅行する事を経験すれば、持続可能な旅行スタイルが身につくという提案です。

残念ながらアジアの場合は、お金にゆとりがある人しか海外に修学旅行はできないので、全員参加型にはまだならなかったのですが、今は経済的にも豊かになってきているので、ようやく修学旅行で交流しながら相互理解をし、文化を学びながら旅行するというものが何かできそうな感じになってきています。最後にお話ししようと思っていますけど、全修協にもそういう役割もしていただけるといいのかなと思います。日本だけの文化としてではなく、世界に広げられるだけのものじゃないかなと私は思っています。以上です。

【 大江 】

どうもありがとうございました。それでは、齊藤先生お願いいたします。

【 齊藤 】

はい、修学旅行の文化的側面ということですが、私は社会科担当とお伝えしましたが、世界の国々の中でも日本という国は学ぶべきことが多い国ではないかと改めて思っています。

修学旅行で子供たちに体験をさせたいと考える教材がたくさんあります。それらを全て子供たちに学ばせようと思うと 2 泊 3 日という日程では足りませんね。それぞれの修学旅行等に行く目的地において、中学生が学べる題材がたくさんあるこの国は、とても素晴らしい国だということを改めて教えなければいけないと思います。

また、観光という要素もありますが、それが前提ではないということです。今日、交通手段や実施形態、また、目的地についても様々ありますし、中には私の所属校でも取り組んでいます。現地に行って外国人とお話をして、そしてその印象等を事後学習で生かす、これは英語かあるいは英語以外の外国語が中心になりますが、日頃の学習の取組を活用させている学校も多いと思います。私が教師になったばかりの頃、あるいは自分が中学生、高校生の頃には修学旅行のルートの沿線の状況、主な産業とか名産品とか、そういったものを学んだ上で、修学旅行に行くという社会的な要素が多かったのですが、今はさまざまな教科で「教科横断的」と言われる、現行の学習指導要領にも則ったような取り組みができるといった意味で、修学旅行あるいは日本の教育活動というのはとても素晴らしいもので、これについては今後とも是非、より質を高めながら継続していけるように取り組んでいきたいなと思っています。以上です。

【 大江 】

どうもありがとうございました。それでは、宮田先生お願いいたします。

【 宮田 】

はい。先ほども少しお話ししましたが、本当に修学旅行は様々な側面があるもので、文化的な側面というだけでお話しするのはなかなか難しいですが、やはり今、他の皆さんが仰っていたように、農業体験とか民泊体験とか、地域産業の体験とかのように、何のためにそこに修学旅行に行くのかというところ、つまり目的の設定が、生徒や保護者の価値観も多様化してきた今、難しいなと痛切に感じています。

私の現任校は京都奈良というすごくオーソドックスな修学旅行を実施していますが、昨年度までの過去 10 年間、管理職として在職した過去 10 年間の 3 校は全て海外修学旅行を実施している学校でした。その経験でいきますと、やはり月並みではありますが、異文化交流、つまり日本とは違う文化に触れるという体験が、高校生にとって大きな衝撃とも言える印象を残すということです。彼らに一番突きつけられるのは「自分が如何に日本のことを知らなかったのか」ということです。

日本人ですから当たり前ですが、外国に行けば、「日本人」と見られるわけで、「日本ではこの点はどうなんだ?」とか、「日本人としてどう思うか」ということを色々と聞かれます。それに対して生徒達は全く答えられなかったりします。特にシンガポールや台湾等のアジアの国に行く修学旅行もありましたが、色々なことを聞かれた時に自分が知らないことがたくさんあるということは、やはり生徒達も考えさせられるわけです。教員としても「先生、どう言ったらいいの?」「何を言ったらいいのかな?」と聞かれても、はっきり答えられないこともあったりします。教員にも跳ね返ってくる部分があるという意味では、海外に行く修学旅行というのは、文化交流としては物凄くインパクトがあるものだと思います。

では次に、今度は真逆のことを言うようですが、去年まで 2 年間勤務した学校では、大阪の私立の学校が彼らの修学旅行の一日を割いて訪問して来るんですね。それで何をするのかというと、探究の発表会をお互いにやります。自分の探究内容を説明するポスターを先方の生徒も持ってきて、こちらの生徒もポスター発表をやって、セッションで何分間かを決めて見たいところ聞きたいところをぐるぐる巡るというのをやります。受けるこちら側は凄くいい機会なのですが、やって来る相手側の生徒達からすると修学旅行の中の一日を割いてポスターセッションをやるというのは、どういう気持ちなのだろうと思いました。

でも、例えば先ほどの報告の中にもありましたが、修学旅行で遊興施設と言いますか、いわゆる楽しむための施設に行くというのは、私個人としてはその教育的意義に疑問を感じていますので、その点から考えると、国内でも出掛けた先の学校で交流をするというのは凄く新しい発想で良い取組なのではないかと思いました。海外修学旅行では、現地の高校に行って、先方の生徒と 2 日間ぐらい高校生活を一緒に過ごし、その学校で日本の学校生活や文化等を発表するというような学校交流という企画が、殆どの場合設定されているのですが、日本の高校同士、あるいは中学同士等、そういう日本の国内の学校同士で交流をするというのは、私にとってはすごく新鮮でした。

その学校は大阪の学校でしたが、いわゆる「ノリ」というものが違います。訪問当日の最初に、生徒達が作った学校紹介のビデオをお互いに見合うという企画があったのですが、ビデオの作り方も全く違いました。そのユーモアのセンスというか、学校紹介ビデオにも生徒目線のオチがあちこちに散りばめられているというところが大きな違いでした。私がいた学校の生徒はごく真面目な学校紹介ビデオを作っていたのですが、その大阪の学校の生徒が作ったビデオは、とても面白く学校を紹介するものになっていました。そうしたところに同じ日本でも大阪と東京の高校生のセンスの違いを強く感じました。私がいた学校の生徒達にとっても、こういうセンスを学校紹介のビデオに入れてくるのだということが凄く新鮮だったようです。コロナの感染拡大時期には、こうした学校交流をオンラインでやることもあったかもしれないですが、国内でも学校同士の交流を対面でやることの意味は凄く大きいなとその時思いました。ポスターセッションでも、生徒同士が対面でお互いに色々なことを聞いて答える。違う学校、離れた学校の一つの学年全員が相互交流をするということに、凄く新鮮な印象を持ったことをよく覚えています。修学旅行で訪問した場所の文化や遺跡等を見て歴史を学ぶというのも大事ですが、訪ねた場所の同世代の高校生と交流するというのも一つの視点だなとその時感じました。今は、生徒や保護者のニーズ、価値観というものがすごく多様化しているので、私達が今まで考えていなかったような方向性の修学旅行というのも一つの文化的な発展形として検討していく必要性を感じた経験でした。

【 大江 】

どうもありがとうございました。本当にさまざまな方法も出てまいりましたね。少し触れましたが、テーマパークを修学旅行のコースに入れるかどうかというのは、いろいろな学校で議論となったと伺っております。

また、先程協会にも注文が出ましたので、よろしく検討をお願いいたします。

先程、保護者が費用を負担して子供を修学旅行に行かせたいという話がありましたが、修学旅行というのは学校にとっても保護者にとっても時間的にも経済的にも負担となるものであること、これはもう否定できない事実であります。各学校は、これまでも修学旅行の教育性の充実、安全性の確保、経済性の適正化について一貫して努力しながら取り組んできたところではありますが、本日の研究大会の主催者であります全国修学旅行研究協会をはじめとする諸団体も、教育性・安全性・経済性、これを基本として学校が実施をする修学旅行への支援をずっと続けてきてくれたわけであります。

いわゆる連合体方式による計画輸送ですよね。修学旅行を支援する諸団体と校長会、旅行会社、鉄道会社等が連携を深めて実現されたものでありまして、修学旅行専用列車による安定した輸送、一般乗客との分離、特急料金半額、あるいは優先的な早期予約など、まさに安全性、経済性が担保されたと言えます。

つぎに、学校がどのように教育性の充実を図るのかということかと思いますが、先生方から修学旅行の経済的側面における課題、あるいは学校生徒保護者の期待する修学旅行、あるいは事業者や地域社会全体からの支援等について、お話を頂戴したいと思います。それでは、越智先生からお願いいたします。

4. 経済的側面を持つ修学旅行

【 越智 】

はい。先ほど石原さんから細かくお話もあり、その前に近畿日本ツーリストの石原支社長からもお話があったように、非常に原価が高騰していてやり繰り大変だと、あるいは人手不足でもう実施すること自体も大変だという話があるわけで、教育的側面があっても、あくまでも積み立てをして親が払って行く旅行なので、その負担を少しでも下げなきゃいけないということはもう当然だと思います。その原価をどう引き下げるかということについては後でお話しますが、一方で実施条件の見直しも是非していただきたいなというのがお願いです。世の中これだけ物価も上がっていますので同じままの状態で作るとするのは非常に無理があるということですから、何とか規定の見直しもお願いしたいというのが一つです。

一方で原価をどうやって引き下げるのかっていう工夫については、関係機関の協力がなければできないことだと思いますので、その点受け入れする自治体だとかの皆さんについても何らかの補助ができないのかなということも御相談したいなと思っています。

先程、連合体の集約輸送の話もしていただいたので、これは是非有効に活用していただきたいんですけども、現在の傾向として、人手不足でどうやって稼ぐのかとなってくると収入を如何に増やすかということを、交通機関も宿泊機関も考えていますから、如何に料金を高くするという傾向になっているのが現実です。

以前はたくさんの人数を扱うことで、すごく収入が制約されてしまうため、非常に収入のリスクだという議論がされたと思います。今は修学旅行の人数そのものも減ってきていますし、それから先程の石原さんのご説明の、沖縄だとか、京都だとか人気観光地がいったんゼロになってしまって、これからすぐに元

通りに戻せるのかっていうことを考えた時に、過去にたくさん来ていたんだから既存のものだと思って値段の設定をするのではなくて、新しくその場所に来てもらうために、どうやって販売促進をし、確実な需要を取り込むのかという発想で是非柔軟な料金設定をしていただきたいというのがお願いします。

今日、日本航空さんも全日空さんもお見えになっているので、修学旅行運賃ももっと柔軟な運賃が作れないのかということも、ぜひ踏み込んでいただきたいなと思います。

今回延期して実施をするという指導が早く出たので、非常に良かったんですけども、もう一つご紹介できてなかったのが 2020 年の 7 月から実施された「Go To トラベルキャンペーン」というもののの中で、実は修学旅行も対象にしていたらいいですね。

2020 年度の Go To トラベルの補助額の合計が 5,399 億円です。これだけのお金が旅行補助に使われました。これ半額で、上限を 2 万円までという設定で、団体枠として 2 割相当、約 1,000 億円が使われていて、恐らく団体があまり実施されなかったのも、かなり修学旅行にも適用されていると思います。

観光庁はデータを公表していないので、できたら全修協で調べて頂くと思います。意外とたくさん使われていたのではないかと思います。ご紹介があった 2020 年度の修学旅行の実施データで高校 31%、中学校 56%も実施できたことの後押しになっているのではないかと思います。

よく「旅行補助」と言われていますけれども、元々は経済産業省の経済対策で作られた政策です。要するに地域の観光需要を作り出すことによって景気を回復しようという政策です。補助額の何倍もの旅行代金を自分で支払うという、レバレッジ効果がある政策だったのです。

それから、北海道などは、修学旅行の誘致に対して補助金をつけていたので、これによって、さっき紹介された行き先のグラフでも北海道がずいぶん増えていました。自治体の政策効果が出たのだと思います。今回コロナによって、既存の人気観光地じゃないところに受け入れ先が広がったわけです。これからも各自治体で修学旅行の誘致政策として、企画提案とセットで補助金を出して頂けないか、是非ご検討いただきたいと思います。原価を引き下げるだけでなく、補助策も使いながら実施することもできるのではないかと思います。

海外修学旅行が、先程コロナ前で約 17 万名の実施があったということなんですけど、これを今、各国が是非誘致をしたいっていう動きが非常に盛んになっています。さっきのデータでは本格的な回復は来年以降となりそうですが、韓国だとか、台湾、ベトナム、マレーシア、シンガポール、グアムとかいう国・地域がいろんな誘致策をとって、是非この海外修学旅行を取りたいという話をしています。放っておくと日本の各地方に来るはずの修学旅行が、海外に行ってしまう可能性もあります。新しい需要をしっかりと取るための補助策みたいなものを各自治体でご検討いただきたいというのが私の方からのお願いです。

以上のようなものを組み合わせながら、コストを下げる工夫と、誘致先での補助金も活用して、負担を下げていくと工夫が必要だと思います。そして一方では、もうちょっと規定を見直していただいて実施基準を緩めていただきたいというのが私からのお願いです。以上です。

【 大江 】

どうもありがとうございました。では齊藤先生お願いいたします。

【 齊藤 】

はい。修学旅行の経済的側面ということですけども、先ほど修学旅行の目的地を設定する上で、保護者

の意見を参考にすることをお伝えしました。その際、保護者から出される話で多いのが、やはり費用がどれぐらいかということです。ただ、そこにこだわって費用が安ければよいというものではない。味を含めてどのような献立の食事なのか。あとはその宿舍の立地等も必ず話題に上ります。

私が修学旅行の引率等をした 2009 年当時、新型インフルエンザが流行しました。そのときに予定していた修学旅行の日程が延期されて実施をしたということがありましたが、その際にキャンセル料については話題になかった記憶がございます。延期はするけれども、実施することは決まっていたので、おそらくは取扱業者の方でいろいろと考えるのだろうと推測しました。

それから、修学旅行の費用は概ね 6 万円を超える額かと思います。コロナ禍以前と比べますとかなり値上がりをしています。駅に置いてある旅行のチラシなどで見ると、修学旅行で行く方面が同じ 2 泊 3 日で半額ぐらいの金額ですね。先程申し上げた保護者の考え方の中で、駅のチラシの金額はこれだけなのに、なぜ修学旅行は高額なのかと問い合わせをいただいたことがかなり多かった時期がございます。

それについてはもちろん、きちんと説明をした上で納得はしていないのかもしれませんが、理解はしていただけたのかなと考えるところです。

ところが、このコロナ禍におけるキャンセル料については様々議論がありました。中止になった場合には、キャンセル料は取り扱いの業者に支払う。学校としても状況がわからない部分もあったので、払わないで済むように何とかならないのか、取扱業者にはお話をしましたし、学校を設置する地区の教育委員会もそのような話になりました。そして、取扱業者から「先生、このままだったら修学旅行、来年、再来年行かなくなりますよ」と言われました。つまりは、宿舍あるいは様々なバスやタクシーの会社が来年以降無くなってしまう可能性がある。だから、キャンセル料についてはいただきますとはっきりと言われました。そこについては、その後の言葉は当然出ません。修学旅行のキャンセル料は負担しなければならないことはわかった。では、誰が負担するか、保護者なのか、それとも保護者以外のところなのか、最終的に多くの公立中学校の場合ですと学校を設置している地区の教育委員会が負担したところがほとんどかと認識しています。もちろん、保護者が負担したという地区もあるかもしれませんが。教育委員会、保護者、そして学校が様々な意見交換をしながら、最終的にその決定に落ち着いたと思います。

このコロナ禍では修学旅行であっても、キャンセル料はキャンセルしたら負担しなきゃいけないことを目の当たりにさせられました。誰が負担するのかということについても。もし又同じような状況が起きてしまったときには同様の議論があると思います。このコロナ禍ではこうだったから、その時にもそうしようということでは、恐らく通用しないと思います。

越智先生からもございましたが、修学旅行というのはお金がかかるもので、当然保護者の負担も少なくありません。今、少子高齢化が言われています。特に少子化が進んでいるという中で、やはり少子化を抑えていくためには、子供たちの様々な活動について何らかの支援が必要なのではないかという考えも持つようになってきました。

これについては私が言うとは何か大きな動きがあるのかなと思われるかもしれませんが、それも一つのとして、やはり少子化からの脱却、日本の将来を考えていく上では、何らかの補助があってもいいのかなと考えます。決してあるべきとは言いません、あった方がいいのかなと考える力が大きくなっていけば、今後また様々なシステムが、仕組みが変わっていくことにつながると思います。

この修学旅行という、とても大事な行事を今後も意義あるものに、そして継続していくために考えを述べさせていただきました。以上です。

【 大江 】

どうもありがとうございました。それでは宮田先生お願いします。

【 宮田 】

はい。皆さんから本当に色々ご意見が出ていましたので、私からは一つ話したいと思います。やはり全ての物価が高くなってきていて、先ほど、海外修学旅行の戻りが悪いという話も出ていましたが、やはり飛行機代が燃油サーチャージを含めると非常に高くなってしまっているため、修学旅行の実施が不可能になっている事態が実際に起こっています。それはもちろん、保護者負担が大きくなり過ぎるということもありますが、教員の引率旅費が賄えないことが一番厳しい現実です。

例えば東京の高校ですと、ひとつの学校の全ての教育活動を行うための予算が一定額配布され、その差配は全て校長に任されています。ですので、この予算内では修学旅行の引率教員の旅費に必要な金額を割けないというような、そこまでの厳しい状況になっています。このため、引率教員の人数を一人減らすとか、もっと飛行機代もかからず金銭的に安く行けるところに目的地を変更するとか、ギリギリの工夫をこらしながら実施に漕ぎ着けているのが現状です。本来なら、この場所に行ってこういう教育活動をしたいとか、あるいはこういう生徒を育てたいからこの場所に連れていくという発想で実施しなければいけないというのが私の持論ですが、既に経済的側面からみると、そうした理想だけではどうにもならないのが現状です。本当に厳しいです。私がこの4月に着任した学校では修学旅行が京都奈良なので、そこまで影響を受けていませんが、例えば海外修学旅行を実施してきた都の中高一貫校の中には、そうした費用面から今までと同じ形態での修学旅行はもう出来ないという状況に実際追い込まれている学校もあります。

それから一時期、早い時期から塾に行っていて、そこでしっかり受験指導をされていないと、中高一貫とか進学校といわれる高校とか、そういう学校にはなかなか進学出来ず、親の資金力によって子供が受けられる教育の質が変わってしまうという教育格差ということがよく社会で取り沙汰されましたが、そういうことは今ではもうあまり当てはまらないのかなと思うこともあります。それは私が日々確認している決済書類から感じることなのですが、いわゆる進学校や中高一貫校等の学校でも、保護者の方の経済的負担は厳しい御家庭も一定程度あるという印象を受けています。

保護者の方が支払う私費負担額のなかでは、修学旅行はやはり一番大きな額ですので、その意味では今のよう状況が続くと、修学旅行には参加できないという生徒達がそれ相応の人数出てくることが危惧されます。もちろんそういうことは従前からありますが、現状がこのまま続くと、それが看過出来ない程度にまでなってしまうのではないかという危惧を若干感じます。現状がどこまで続くのかは分かりませんが、先ほどから何らかの支援や補助が必要ではないかという話が上がっていたように、全員参加が基本の修学旅行という日本の文化を守るためにも、そういうことを考えていく必要があると感じます。これは、修学旅行の目的地となる観光地とその地域の経済の活性化を図るという視点や、そうした場所に生徒達を連れて行って様々な日本の歴史や文化や地域性というものを学ばせるという修学旅行の大きな意義という視点からも、考えていかなければいけないことだと感じます。

【 大江 】

どうもありがとうございました。では宮崎先生お願いいたします。

【 宮崎 】

修学旅行の経済的側面における課題ということでございますけど、私は修学旅行の日本経済への影響など、詳しくありませんので、ここでは皆様お話しされていた修学旅行の経費負担について、ちょっと大き

なところから考えを申し上げたいと思います。

皆さん、御存じのように現在、我が国では少子化社会が進行しているわけです。少子化問題への緊急の対応策として「教育費の負担軽減」は国においても各自治体においても避けて通れない課題です。給食費や学校外教育費、医療費などはよく話題になりますが、修学旅行は、小中学校、高等学校で全児童生徒を対象に実施される教育活動でございまして、この保護者負担を軽減することは大きな課題だろうと思います。

特に国際化の進展する現在、高等学校での海外への修学旅行も拡大すると思われますので、高等学校への進学率を考えると、修学旅行の経費負担の軽減も大切だと思います。修学旅行経費の補助制度は、現在では都道府県の誘致を目的とした制度とか、それから経済的に厳しいご家庭への補助などが行われているといったところでしょうか。

ところで、去る6月16日には、新たな教育振興基本計画、及びいわゆる「骨太の方針」、正しくは「経済財政運営と改革の基本方針2023」が閣議決定されました。教育振興基本計画は平成18年に全面改正された教育基本法に基づき、政府が策定する教育に関する総合計画で、今後5年間の国の教育政策全体の方向性や目標、施策などを定めるものです。

今回、新たに決定された教育振興基本計画は第4期ということになります。また、地方公共団体において、教育振興基本計画や教育大綱を策定する際には、国の教育振興基本計画を参酌することとされておりますので、今後は、それぞれの都道府県市でも、この計画の方向性等を参考にして教育振興基本計画が策定されることになると思われます。

次期教育振興基本計画の策定に当たっては、令和4年から中央教育審議会で審議が行われ、今年3月8日に答申がありました。その答申を受けて閣議決定が行われましたが、答申の内容には一部修正や追加修正が行われました。閣議決定された教育振興基本計画には、「教育投資の在り方」について「公教育の再生は少子化対策と経済成長実現にとっても重要であり、取組を推進する」という言葉が加えられました。中教審答申にさらにその重要性を加えたわけですね。

また、「骨太の方針」の中には、「世界に冠たる令和型の質の高い公教育の再生に向けて、教育の質の向上に総合的に取り組む」という言葉も見られました。ちなみに、「骨太の方針」の中で、教育や研究について書かれる「経済社会の活力を支える教育・研究活動の推進」という部分の記述量は2023では昨年度2022の倍になっておりまして、教育に関してよく書いていただいたと感じました。

ただし、こうした計画や方針が政府の段階で決定されたとしても、それが予算化を確約するものではありません。今後、概算要求や予算折衝を経て、政府の予算案に反映される必要があります。家計の教育費支出が減少することで、修学旅行経費の負担感も低下すると思います。修学旅行は、先ほども申し上げましたように、我が国が世界に誇り得る教育活動です。学校教育や保護者負担に対して、今後一層の財政的支援がなされるよう期待するところでございます。

私からは以上です。ありがとうございました。

【 大江 】

どうもありがとうございました。なかなか厳しい現実がここに出てきたわけでありましたが、政府予算にも期待したいと希望を持ったところであります。

この経済的側面というのは避けて通れない課題ですよ。でも、我々教師は何とか生徒を連れていきたい。修学旅行に行かせたいという思いは強いと思うんです。様々お話を聞いてまいりましたが、そろそろお時間も参りましたので、最後の仕上げでございます。

修学旅行というのは自主性、節度節制とか、思いやり、礼儀、友情、公德心、伝統文化、あるいは自然愛護、感動など各学校の目標として、様々な先生方の思いが修学旅行のしおりや実施要項に拝見できるわけであります。私も修学旅行が一層発展してほしい。そう思う一人であります。

それでは、先生方からこれからの修学旅行への期待及び協会への期待も含めて一言ずつお話を伺いたいと思います。では齊藤先生からお願いします。

5. これからの修学旅行と全修協

【 齊藤 】

はい。とても壮大なテーマだなと思っていたところで最初に振られました。

教員になっていきなり修学旅行の企画に携わらせていただいたことは初めにお伝えしました。今の大江先生のお話を伺っても、それを普通にやっていたと自分を誇らしく思いました。それは決して自分ごとだけではなくて、それを導いてくださった先輩方、あるいは見守ってくださった保護者や地域の方々に対する思いでもあります。

そして、修学旅行というものは大変重要ではあっても、実施しなければならないものではない。そして子供たちには、修学旅行に自分たちは行けるものだと思えてほしいと思います。やはり実施するには実施するなりのものがなければいけませんし、行くためには行くためのものがなければいけない。さらに、いざ実施をしよう、修学旅行に行くぞとなったときに、今度はどこに行くか何をやるかということをしかりと示した上で、その教育的な意義を改めて確認していかなければいけないと思います。

現在、海外からの日本に来てくださる外国人旅行客の方も多くなっています。先日、京都に行った際には、市バスを使った班行動を私の学校でもやらせているんですが、修学旅行生が乗るはずの市バスに外国人の方もたくさん乗っていて、特に清水寺周辺の停留所では停まらないし、人が乗せられないという状況でした。

人が多い中で、修学旅行の目的を達成させるために、どこに行くのかということもしっかりと考えなければいけない。そして何をやるのかということも考えて、費用対効果という言葉は適切ではないかもしれませんが、その行った先で2泊3日という行程の中で子供たちの印象に残る。それこそ何十年後かに同窓会で会った時に、毎回のようには話に出るような、そういった修学旅行を実現するために、学校現場の人間としてこれからも取り組まなければいけないと思います。

また、協会の皆様についてはこれまでも支援をしていただいているところではありますが、やはり引き続き相互に連携をしながら、今後、修学旅行の質を高めて、子供たちにとって、そして保護者にとって、もちろん学校にとってより良い行事となるように手を携えて取り組んでまいりたいと思います。

本日はどうもありがとうございました。以上です。

【 大江 】

ありがとうございました。宮田先生お願いします。

【 宮田 】

はい。修学旅行というものが、何か一つの興味関心に沿って集まった生徒達だけが行くものではなくて、一つの学年が、その先生たちと一緒に通常とは異なる場所に行って教育活動を行うものであり、その教育

的価値はものすごく大きいということは充分理解しております。それを理解したうえで、私が長い間やりたかったことで、前の勤務校でやりかけのまま異動になってしまった、とても残念に思っていることが一つありまして、そのことをお話したいと思います。

それは私立の高校では、もうかなり前からやっているところもありますが、修学旅行で、教員が自分の好きなテーマを選び、そのテーマに沿ってこの国や地域・場所に行きたい、こういうことをやりたいと生徒に示します。生徒達は、各教員が示したテーマと行先の修学旅行の中から自分が行きたいものを選んで、提案者である教員と一緒に生徒達はそれぞれ全く別の場所に行くという修学旅行です。これをかなり前からやっている私立の高校がありまして、私もその頃は若かったので、このことを聞いた時に、「この学校に行って働きたい」と思ったものです。自分が考えた好きなテーマで海外を含む修学旅行を実施し、こういう生徒を育てたいという目標を持って、それに賛同する生徒達と一緒に修学旅行に行くというのは、考えただけでワクワクしますし、教員として大きな達成感のあることだと想像出来ました。また、生徒達にもすごく楽しく、充実した修学旅行を提供出来るのではないかと思います。

しかし、SDG sという言葉が先ほど何回も出てきましたが、「総合的な探究の時間」の導入により「探究」というものが教育界で大きく取り上げられていくなか、時間が経つうちに、私の中で違う考えが浮かんできたのです。いわば教員が作るこの修学旅行というのは、実施に至れば教員が楽しく充実感を味わうことが出来るのは当たり前で、実はその楽しみや充実感を生徒に味わわせなければいけないのではないかと思います。つまり、すごく究極の話なのですが、「生徒が作る修学旅行」というのが出来ないかということを考え始めてしまったのです。それはすごく難しいし、大変なことだし、高校ではほぼ無理だろうと思います。高校3年間はものすごく短いということを、中高一貫校から異動してくると本当にひしひしと感じます。そこで、前任校は中高一貫校でしたから、6年間という時間的な余裕のあるこの学校なら実現出来るのではないかと思います、実はそれに着手したのです。ところが、計画段階から実際に修学旅行を実施するまでには4年必要だろうと考えていたところ、2年で異動することになってしまったので、その実現を見られないということになったわけです。このことは、とても残念でした。

探究活動を通して、生徒達が自分で調べてきたことを、ある国や場所に行って、さらに深めたいということは現実にあると思います。それを自分達で修学旅行として計画し、自分達でプレゼンを実施して、旅行業者の方も含めて一緒に大人目線でしっかり見て聞いてもらい、「これは実施出来ない」、「絶対これは無理。計画が甘すぎる」といった厳しいアドバイスもしていただく。こうしたことを何度も繰り返して計画を練り直し、生徒達自身による投票を重ねて、最終的には3案ほどに絞り、3方面に分かれて修学旅行に出掛けるというようなことが実施出来たら、生徒にとってすごく充実感のある、それこそ本当の意味での「探究」ではないかと思うのです。生徒達が考えたことを旅行業者という社会人の目で厳しく精査してもらおう。訪問する国の危険度とか、そういう類いのものも全部調べて実現まで漕ぎ着けるということをやってみたいと思ったのです。先ほど、3年間しか時間がない高校ではこの実現は難しいのではないかといいましたが、高校での実現が難しいのではと考えるもうひとつの理由は、学年の規模です。たとえば現任校は8クラス規模ですので、この320人を「生徒が作る修学旅行」で様々な国や地域に連れて行くのは、旅行規模や引率教員の人数、費用等、様々な面で難しいのではないかと思います。ですが、中高一貫校は1学年4クラス規模ですから実施可能なのではないかと思います。志半ばで異動となり、実施までは見届けられなかったのですが、この取組がすべて成功裡に終わるのかどうかは、もうあと2年ほど待たなければなりません。この取組の目的地は、当初私がイメージしていた海外でなくてもいい。例えば地層とか地質的なことがすごく好きな生徒達だったら、千葉を目的地にするという選択肢もありだと思います。生徒それぞれの興味によって、海外に行かないと探究出来ないことであれば、海外という選択肢もありということです。ただ、実施まで漕ぎ着けるのは大変なことで、教員の働き方改革には逆行しますのでなか

なか難しいというのも事実です。

でも、探究という考えを突き詰めていった時に、修学旅行と結びつけてそういうことが出来たら素晴らしいだろうと思います。大阪の生徒さん達とのポスターセッションに、修学旅行のひとつの進化を感じましたが、現存の修学旅行にはない新しい形を希求しながら将来的に私達が発想を柔軟にしていくことも必要なのではないかと思います。

現存の修学旅行も本当に素晴らしいのですが、時代もどんどん変わっていますし、社会も変わっています。保護者や生徒達のニーズというのもどんどん変わっているので、そういう変化に合わせた新しい形の修学旅行を目指して、旅行業者の皆さんにも協力していただき、歩みを共にしていただきながら、修学旅行が発展・進化していくような方向に向かっていけたらいいのではないかと考えています。今日はありがとうございました。

【 大江 】

どうもありがとうございました。宮崎先生お願いいたします。

【 宮崎 】

これからの修学旅行と全修協に期待することを申し述べたいと思います。

先ほど、「文化としての修学旅行」で明治の時代の修学旅行を紹介しましたがけれども、昨年6月27日の朝日新聞の夕刊ですが、「修学旅行 礼は箸袋にあり」という印象に残る記事がありました。昨年のもので、5段に及ぶ大きな記事だったので、覚えている方もこの中にはたくさんいるかと思いますが、ここでご紹介させていただきたいと思います。

埼玉県新座市立第二中学校の生徒さんの話題でした。「出発したばかりの修学旅行生たちが食べた朝食を片付けていて、旅館のスタッフたちは幾つものメッセージが残されているのに気付いた」という文から、その記事は始まります。

「何か書いてある」「こっちも」「すごいね」その場にいた10人ほどの声が自然と弾んだ。ここは京都市中心部の旅館「ホテル本能寺」…と続きます。「本能寺」は今週の大河ドラマでも大変話題になりました。

「本能寺」のお寺そのものは場所も変わっていますが、歴史的な大事件に縁のある観光地にある、修学旅行ではおなじみの宿だと思います。記事の続きを読みます。

「6月11日の朝、スタッフらが見つけたのは、こんなメッセージだった。「3日間 おいしいご飯をありがとうございました」「一生の思い出です」「とてもおいしいご飯をありがとうございました。3日間のエネルギーになり、京都を楽しむことができました。ホテル本能寺 最高～！」お膳の代わりの敷紙や箸袋に書かれていた。笑顔のイラストも。汚れないように気をつけて回収してみると、その数は50を超えた。

この「置土産」を残した埼玉県新座市立第二中学校（3年生332名、引率者17名、2泊連泊）の伊藤進校長はJR京都駅まで見送りに来た旅館スタッフにこの話を知らされます。教師が生徒に指示したのではありませんでした。生徒に聞くと「時間があつたし、美味しかったので」とか、「黙食で『ごちそうさま』を直接言えなかったので書き残した」と答えたそうです。コロナ禍で修学旅行は3年ぶり。校長先生は「今回旅行に行けたのがうれしくて、いっそう感謝したかったのだでしょう」とのこと。感謝のメッセージは1泊目から残されていた。客室係の責任者の方は「客室でもメモ帳やノートに書いてあった。うれし涙をぼろぼろ流すアルバイトさんもいた」と明かす。また、支配人の方は旅館の全ての部署の社員へメッセージを回覧した。「また頑張ろうという気持ちを与えてもらった。修学旅行の受け入れはいいなと改めて思

う」とのこと。

旅館は生徒たちが出発して 3 日後、ツイッターで次のように発信したそうです。「お食事を作ることは私どもの毎日の仕事ですが、こんなに嬉しいことはありません。皆様の思い出作りのお手伝いが出来て光栄です。生徒の皆さん、地元に戻られても元気で過ごしてくださいね。調理場一同より」。

新聞の記事には、実際に生徒たちが箸袋やノートの紙などに書いたメッセージが 10 枚写真で掲載されています。とても細やかな気配りでお礼の気持ちがしっかり書き留められています。

私は先ほどお話しした中で「集団や社会の形成者としての見方・考え方」を働かせた修学旅行ということと申し上げました。社会を形成し、社会に参画できる人間とは、特段優れた知識や能力を持たなければならないというものではないと思います。相手を尊重し、共に生きること感謝し、共に幸せになろうという心を持つこと。そしてそれを実行する勇気を持つことが大切だと思います。今、様々なところで「ウェルビーイング」という言葉が語られています。SDG s の 3 番目の目標に書かれてから広がってきた言葉ですね。この修学旅行生の中には、「ウェルビーイング」の実現に向けた資質・能力を確かに見ることができます。

全国修学旅行研究協会が、多くの教育的価値と子供たちの人間としての成長に満ちた修学旅行の充実をこれからも支えていただくように願っております。

本日は貴重な機会をいただきました。ありがとうございました。

【 大江 】

どうもありがとうございました。では越智先生をお願いいたします。

【 越智 】

修学旅行をどのように継続し発展させていくかということについては、もう私も全く同様に、何とかのこの関係者の皆さんのお力を借りて守り育てたいと思っています。

協会にお願いしたいこととして、まず研究発表のデータです。これは素晴らしい財産だと思います。こういう形でコロナの影響をきっちとデータで取っているところは多分、どこの国にもないのではないかと思いますので、本当は英語にして国際的に出しても多分引用してもらえらるぐらいの素晴らしい成果ではないかと思います。それぐらいいいデータだと思います。海外修学旅行についても、文部科学省は 2 年に 1 回しかデータを取っていませんし、それも継続してずっと取っていて、サンプル数も含めて、これだけしっかりやってらっしゃるのは全修協しかないのです、私も海外でいろいろな話をする時も全部全修協のデータを使わせていただいています。このデータを取るという部分は、まさに研究協会らしい立派な仕事だなと思っていますので、それはもっともっと発信していただきたいと思っています。

それから仕入れの問題ですね。輸送の集約なども含めて、今まで連合体輸送だとか、色々なことのご努力をされてきていると思うんですけども、是非それも含めて継続していただきたいというのがお願いです。

それから、もう一つソフト面でこの持続可能な社会の担い手づくりという新しい指導要領に沿った事例集だとか、そういったものをうまくまとめられるといいと思います。何しろ今ブームなので、何でもかんでも SDG s にしておけばいいという感じになっているんですが、どういうものが本当に大事に役に立つのかということも含めた研究事例集みたいなものを成果として発表していただくことを期待しています。

それから、これが全修協へのお願いですけれども、今日は、観光庁もお見えになっているので、今修学旅行について海外修学旅行を相互に増やしましょうという話が国で動いています。当然観光庁だけではなく、文部科学省も含めて、もちろん外務省も含めた仕組みをもう一度ちゃんと作り直さなくてはならないと思います。コロナで一度途絶えていますから是非そこはやりたい。

日本の生徒も海外に行き、刺激を受けると同時に、海外の皆さんにも日本に来ていただいて、刺激を受けてもらって相互理解するという一番手っ取り早く効果のある方法だと思います。その国際化のプログラムを、国を挙げて官民一体としてつくっていただきたいなと思います。

特に学校交流のメニューだとか、学校交流の斡旋だとかという、割とそういう一番基本的なことで引っかけたりするケースも多い。台湾なんかは学校交流をするときの様々な経費、例えば歓迎幕を作るとか、資料を翻訳するとかということについては国が補助金を出しています。ですので、どういうケースでどのように有効にお金を使えるのかということも含めた研究をしていただいて、是非、相互交流を具体化していったほしいと思います。

最後に、最初にも言いましたが、旅行会社や教育旅行に夢を見て、業界に入る若者がどんどんもって増えてくると思います。コロナでちょっと志望が減った感じですが、今また採用も増えてきましたので、是非この修学旅行の現場で働いてみたいという若者がどんどん増えていますから、彼らの夢を実現できるように、もっともっと新しい未来を作れるような仕事になれるように、私もなんとか頑張りたいですし、皆さんのお力もお借りしたいということを最後の言葉とさせていただきます。ありがとうございました。

【 大江 】

どうもありがとうございました。約束の時間がきてしまいました。本来ならば、会場の皆さんからの言葉を頂戴したいのですが、時間の都合上、お手元のアンケート用紙にご意見等を書いていただければと思います。本日は大変充実したシンポジウムになりました。シンポジストの皆さんに今一度盛大な拍手をお願いいたします。

以上をもちまして、記念シンポジウムを終了いたします。





《第 40 回 全国修学旅行研究大会》

参加者数：会場参加者 134 名 オンライン参加者 66 名

情報交換会参加者数：65 名

出展情報ブース：19 団体

第40回 全国修学旅行研究大会

[報 告 書]

2023(令和5)年9月1日

発行 公益財団法人 全国修学旅行研究協会

《本部事務局》〒102-0074 東京都千代田区九段南 2-6-8
九段南ビル 6 階
Tel 03-5275-6651 Fax 03-5275-6653

《名古屋事務局》〒450-0003 名古屋市中村区名駅南 2-14-19
住友生命名古屋ビル 6 階
Tel・Fax 052-561-7876

《大阪事務局》〒556-0017 大阪市浪速区湊町 1-4-38
近鉄新難波ビル 7 階
Tel 06-6636-0885 Fax 06-6636-0890

URL <http://shugakuryoko.com/>